

こども風土記

柳田国男

青空文庫

小序

子どもとのお母さんたちとに、ともどもに読めるものをという、朝日の企てに動かされたのであったが、私にはもうそういう註文ちゅうもんに合うような文章を書くことができなかったにいらしい。「こども風土記」が新聞に連載せられている間、面白く読んでいるよと言つて励ましてくれた人は多かつたが、それはたいいは年をとった仲間だけであつた。近所のまたは親しい少年少女の中には、氣をつけていたけれども、読んでいる者ははなはだ少なかつた。

うれしかつたのは友人の一人が、うちではいつのまにか朝日が切り抜いてある。子どもが読んでから帳面に貼はるそうだと、告げてくれたことである。九州の或る町からは、お清せい書いしよのような字を葉書に書いて、鹿しかの角つのの遊びを知らせて来た少女がある。母が柳田さんにお知らせするとよいと言いましたからとあるのを見て、是これだけは少なくとも予定の読者であつたことがわかつた。小学生の通信は、この以外には二つ三つしか受取っていないが、それでも東京・大阪の都会へ出て働いている人で、ほんの四、五年前の子どもかと思われ

る人たちから、あどけない感激の手紙は幾つか来ている。始めて親に離れ故郷に別れて、
人^{ひと}中^{なか}の生活をする者の胸のうちには、或いはもう一度「子ども」の感じが蘇^{よみがえ}って来るの
ではあるまいか。もしそうだとすると、強^しいて現在の子どもと母ばかりを追うてあるくにも
及ぶまいかと思う。一つの新しい経験は、横浜近くに住む或る一人の女性から、こういう
意味のことを私へ言つて来られた。自分は亡夫が外国にいた留守^{るす}の間、二児を連れて伊
予^よの松山^{まつやま}に住んでいたが、鹿々何本の遊びは毎日のように子どもが窓の外へ来て遊んだ
のでよく知っている。ただそれがどういう所作^{しよさ}を伴うかは出ても見なかったの言うこと
ができない。当時最も熱心にこの遊戲に参与した二人の子どもに問えばすぐに判^{わか}るのだが、
一人は中支^{こんし}にあり、一人は九州の或る職場に働いているので、今は尋ねてみる方法もない
という。すなわち茲^{こゝ}にもまた二十年前の子どもとお母様とが、再びその感慨を新たにしてい
るのである。母といた日の悦楽は、老いたる私にさえも蘇^{よみがえ}ってくる。つまりはこの文章
は人のために書いたのではなかった。

「こども風土記」が本の形になつて世に遺^{のこ}ると聴^きいて、改めてまた私は考えて見た。現在
の少年少女が老い尽し、彼らの孫曾孫^{ひまご}が嬉々^{きき}として膝^{ひざ}の前に遊び戯^{たわむ}るを見る時代には、
この一卷の文章は果してどうなっているであろうか。人間に永遠の児童があり、不^ふ朽^{きゆう}の

母性があることを認めつつも、それを未出の同胞国民とともに、談^{かた}りかわすべき用意は整っていると言えるであろうか。僅^{わず}か百年を隔てた祖先の文章は、もう註^{ちゅう}釈^{しやく}がなくては我々には読めない。今日の文章はさらに一段と時代の制約を受けている。是がいわゆる現代語訳のお世話になり、味も匂^{にお}いもすり切れてしまつてから、ただ義理だけに敬われるようなことのないように、時の古今に互^わつた国語の統一ということが、もう考えられてもよかつたのではないか。無始^{むし}の昔から無限の末の世まで、続いて絶えない母と子との問題であるが故に、ことにその感を深くするものである。読者をただ眼前の人のみに求めた私たちの態度にも懺悔^{ざんげ}すべきものが至つて多い。もう間に合わぬかも知れぬけれども、是を機縁として改めて文章の書きかたを学びたいと思う。

昭和十六年十二月十四日

伊豆古奈の温泉において

著者しるす

鹿・鹿・角・何本

一昨年の九月、米国ミズリー大学のブリウスタアという未知の人から面白い手紙の問合せを受けた。もしか日本にはこういう子供の遊戯はありませんかという尋ねである。一人の子が目隠しめかくをして立っていると、その後にいる別の子が、ある簡単な文句で拍子ひょうしをとって背なかを叩きたたその手で何本かの指を出して、その数を目隠しの子に当てさせる。英語では問いの文句が、

How many horns has the buck? 「いかに 多くの 角を 牡鹿おしかが 持つか」

ドイツのも全くこれと同じだが、国語のちがいで一言葉ひとことば少なく、イタリアでは四言葉、スウェーデンやトルコなどは二言葉ふたことばで、やはり意味は鹿の角の数を訊くことになっている。目隠しをする代りに壁にもたれ、また四つん這よいになって、その背に跨またがって、指を立

てて問う例もある。もう長いあいだかかって調べていると見えて、これ以外にスコットランド、アイルランド、米合衆国、フランス、ベルギー、オランダ、ギリシア、セルビア、ヘルツェゴビナ、エストニア、スペイン、ポルトガルにも同じ遊びのあることを確かめたといっている。日本にももしかそれがあったら、面白いと思うがどうかという質問である。古い文献では、ペトロニウスの諷刺詩ふうししの一つにも出ているという話である。あったらなるほど面白いが、どうもまだ聞いたことがないようだ、と皆がいうので、一応そういう返事をして置いて、なお念のため『民間伝承』の会報にこの手紙を訳して載せておくと、ほどなく二カ所から、あるという報知がやって来た。ありませんなどという答えはめったにできるものでないということを、しみじみと我々は経験したのである。

滋賀県の今津いまづ近くの村では、少なくとも二十年ほど前まで、この遊びをしたということ、を、長浜女学校の三田村君がまず知らせてくれた。じゃんけんに負けた一人の子は、窓のへりなどにつかまって身を曲まげていると、勝った方の子がそれに馬乗うまのりになって、指を出して、その数を下の子にいい当てさせ、それが当るまではこの問答をくりかえし、あたれば今度は上の子が答える番にまわるのだそうである。馬乗りになるだけで、もう背なかは打たなかったらしいが、やはりその文句は、

鹿^{しか}・鹿^{しか}・角^{つの}・何^{なん}本^{ぽん}

と、くぎつて唱^{とな}えていたという。

あてもの遊び

鹿の角なら二本にきまつているようなものだが、これは角の又またがいくつに岐わかれているかということらしい。御存ごぞんじの通り牡鹿おしかの角は、成長するにつれて枝の数が多くなり、五本ぐらいがまず大鹿である。単に子どもの指の遊びに似つかわしかったというだけでなく、山の獵りようし師にとつても重大な問題で、毎度おそらくは声を立てずに、こうして指を出して相手に知らせ、または噂うわさをしていたことがあつたろうかと思う。それを子どもが遠い遠い昔に学んで忘れずに持ち伝えていたものらしい。今日の語でいうと、この遊戯は生活に即している。

これがもし琵琶湖岸びわこがんの片隅かたすみに、たった一カ所しかない例だったら、或いは近年米国の宣教師が来て、教えて行つたろうなどと、ありもせぬことを想像してすます人が多かつたろうが、幸いなことには九州に一つ、飛び離れて同じ「鹿なんぼ」の遊びがあつた。久留くろ米中学校の峰元みねもと君は、近ごろ市中でこの遊戯を子どもがしているのを見かけたと報ぜら

れた。それから附近の村里を問合せてみたが、三井^{みい}郡にはたしかにあって、他の郡にはまだあるという人を知らぬという。私も強い断定は差^さ控^{ひか}えるが、これは近江^{おうみ}から、または近江へ、ちかごろ輸入したものでないということはまあ言えそうである。

ただし詳しい方式はもう一度見なおす必要がある。熱心なブリウスタア氏に知らせてやりたいのは、久留米の方でも背なかを叩^{たた}かないかどうか。「鹿^たなんぼ」という文句があまり簡単だから、あるいはこれも馬乗りの方かも知れぬが、文句が残っている以上は元^{もと}は拍^ひ子^{ようし}をとつて、叩いていたのではないかと思う。

これによつて、ふと心づくことは、今でも東京の小学校の子どもが、別れるときなどにちよいと立ちもどつて、

おみやげ 三つに 気がすんだ

という類^{たぐい}の、どうしても意味のとれない文句を唱^{とな}えて、友だちの背なかを打つことである。流行といつてしまえばそれでも説明はつくが、あまりにも無意味だから何か別の形があり、それが鹿・鹿・角・何本でないまでも、少しはこれに近いような「あてもの遊び」が、行

なわ^なれて^ごいた名残りではないかと考えている。人の背なかを打つということは、そう軽々しい戯^{たわむ}れではない。それでも喧嘩^{けんか}にはならぬだけの約束が、かつてはこれを許していたものの、といつても理由が一つあるのである。

かごめ・かごめ

遊戯の童言葉わらわことばとは、本来は歌と舞まいとのように、表裏不可分のものであったらしい。新しい小学校の遊びにも、なるべくは唱歌を添えて与えようとしているが、文句がやや混入まじいしているためだろうか、言葉に力を入れすぎて所作しよさの方が軽く取扱われ、もっとも熱中する遊戯にはかえって默演もくえんが多い。自分はこの二つのもののしっくりと結び合っているか否かによって、子ども遊びの新旧が窺うかがわれるように思うが、どんなものであろうか。

二つの例を拾ってみるならば、このごろはもうあまり耳にしない遊戯唄ゆうぎうた、

めぐれど端無はしし たまきのごとくに……

という変った節ふしの文句は、調べたら作者のきつとわかるほど新しいものだが、これをうたうべき遊戯は前からあった。東京などで古くから、蓮華れんげの花が開いたというのが同じもの

で、つぼんだ、開いたという別の動作があるが、歌の半分はやはり小さな手を繋いで、くるくる廻っている間に歌うもので、しかもこれにはなお今一つ前の形があるのである。どうしてあのようにいつまでも、面白がつて続けているかと思うほど、意味の解しにくい文言の羅列だが、「かごめ・かごめ」というのがやはりまた同じ遊びであつた。

かごめ かごめ 籠かごの中の鳥は いつく出やる

夜あけのぼんに つるつるつーべつた

或いは、

鶴つると亀かめとつーべつた

ともいつている。そういうと一しよに全員が土の上にしゃがんでしまい、そのあとで、

うしろの正面だアレ

というのもあり、また全くそれをいわないのもあるが、動いている人の輪がはたと静止したときに、真^{まうしろ}後にいるものを誰かと書くのだから、これは明らかに「あてもの遊び」の一つであつた。子どもはもう知らずに歌っていることであろうが、気をつけてみると、この「かごめ」は身を屈^{かが}めよ、すなわちしやがめしやがめということであつた。誰が改作したか、それを鳥の鳴^{かもめ}のように解して籠の中の鳥といい、籠だからいつ出るかと問いの形をとり、夜明けの晩などというありうべからざるはぐらかしの語を使って、一ぺんに坐^{すわ}ってしまうのである。鹿・鹿・角・何本に比べるとたしかにこの方が試験はむづかしい。そうして数多くの子どもが加わることができて、楽しみは大きかったかと思われる。それが少しずつ形をかえて、ひろく全国の「昔の子ども」に、今もなお記憶せられているのである。

中の中の小仏

西洋の子どもの中にも、まだ幾種かの当てもの遊び（Guessing Games）が残っている」とは、こういうことを書いた本によくいうが、あちらではもうその起りを説明することができなくなっている。日本ならそれが簡単にわかるのである。

子どもが手を繋いで輪になって、ぐるぐる廻る遊び、全国どこにもある「中の中の小仏」というものなどは、鹿の角を幾分か複雑にして、たくさんのお兄がいつしよに楽しめるようにただで、やはり問答が中心であった。六十年も前に私などが唱えていた詞は、

中の中の小坊さん　なアぜに背が低い
親の速夜にとく食うて　それで背が低い

というのであったが、この文句は皆さんの覚えておられるのと、多分は大同小異であろう。

あるいは魚ととの代りに「海老えび食うて」という者もあるようだが、いずれにしたところで父母の命日に、そんな物を食べる人は昔は一人もいなかった。それがおかしいので何なんべん遍も何遍も、同じ歌ばかりをくり返していたけれども、大阪でも東京でも、そのあとに添えて、

うしろにいる者だアレ

または「うしろの正面だアレ」といって、その児この名を当てさせるものが多かった。或いは目隠めかくしをさせ、もしくは顔を両手おほで掩おほわせて、正面に踞しゃがんだ児を誰さんと、いわせることにしていたかとも思われる。鹿児島県の田舎いなかなどでは、それでこの遊戯をマメエダレとも呼んでいた。マメエダレはすなわち真前ままえ誰である。

遊びは後に少しずつ改良せられている。中の小坊の手に御盆おぼんを持たせて、誰それさん御お茶ちやあがれと言わせたり、または一つ一つ手を繋いだところを探さぐって、ここは何門と尋ねる問答を重ね、答えによってそこを切つて出るような遊びかたもあった。いずれも小児が自分たちで考えだしたもので、そんなことに世話をやく成人はいなかったろうと思う。それから蓮華れんげの花は開いたといい、または「かごめ・かごめ」という文句に取換とりかえたりしたの

も、あんまり上手^{じょうず}だから別に作者があつたように考える人もあるか知らぬが、私たちは、なお、かれらの中の天才が興に乗じて言いはじめた言葉が、自然に採用せられて伝わったものと思つている。遊びはもともと輪を作つて開いたり答^{こた}んだり、立ったり屈^{かが}んだりするのが眼^{がん}目^{もく}であつた。そうして歌は、またその動作と、完全に間拍子^{まびょうし}があつている。作者がほかにあつたろうと思われぬのである。

地蔵あそび

「中なかの中なかの小坊こぼうさん」は、私などは弘法こうぼう様のことかと思っていた。これを小仏こほとけと唱となえていた子どもの、近所にあることも知っていたのである。山梨県ではそれをまた、

中なかの中なかの地蔵じぞうさん

とうたい、その「中なかの地蔵じぞう」が後うしろで周囲の子の頭たまを叩たたきまわって、

外そとの外そとの小僧こぞうども なぜ背が小さいな云々うんぬん

といっていたそうである。茨城県で地蔵遊びといったのもこれで、一人をまん中にかがませて目かくしをさせ、周囲の輪の子どもが廻りながら、やはり「なぜに背が低い」を唱え

る。そうしてその運動を止めるや否や、中の地蔵が一人をとらえてだれさんと名をあてる。それが的中すると地蔵が代ることは盲鬼めくらおにの一種とよく似ている。福島県海岸地方の地藏遊びのことは、前に『日本の伝説』の中にも述べておいた。これは輪の子どもが口そくを揃えて「中の中の」の代りに、

御乗おのりやアレ地藏様

という言葉こを唱える。乗るとはその児へ地藏様に移って下さいということであつた。そうするうちにまん中の児は、しだいしだいに地藏様になつてくる。すなわち自分ではなくなつて、色々のことを言い出すのである。そうなると他の子どもは口々に、

物教ものおしえにござつたか地藏さま　遊びにござつたか地藏さま

と唱え、皆で面白く歌つたり踊つたりするのだが、元もとは紛失物などの見つからぬのを、こうして中の中の地藏様に尋ねたこともあつたという。

古い『人類学雑誌』に出ていたのはもと仙台附近の農村で、田植^{たうえ}休みの日などに若い男女が集まって、大人ばかりでこの地藏遊び^{おとな}をしていたそうである。これとても遊びで、信心からではなかったが、まん中にややお人よしというような若い者を坐^{すわ}らせ、ほかの者が輪になって何か一つの文句をくりかえしくりかえし唱えていると、しまいには今いう催眠状態に入って、自分でなくなつて色々の受返^{うけへんじ}事をする。いずれ男女の問題などの、罪もない笑うようなことを尋ねて、それに思いがけない答えがあるので面白かつたのである。うが、それが今一つ山奥の村へ入って行くと、まじめな信心者だけで集まって、この中座^{なかざ}のいうことを聴^きいていた。それが昔の世にひろく行なわれた神の口寄^{くちよ}せというものの方式だったので、つまりは子どもがその真似をくりかえして、形だけでも、これを最近まで持ち伝えていくれたのであつた。

鉤占いの話

成人と子どもと、同じ遊びをちがった心こころもち持で、持ちつづけていた例はほかにもある。おとなの遊戯などということは考えにくいようだが、今でも元気な人たちは退屈すると、おりおり思いついて子どもみたようなあてものなどをする。それが案外新発明というのが少ないのである。ことに酒宴の席では古くさいものが面白がられる。たとえばある一人に目隠しめかくをして盃さかずきを持たせ、

こゝらか　まだまだ　こゝらか　そこそこ

などと、飲み足りなそうな人に盃をさす戯たわむれは、愚劣なものだが、まだまるつきり廃すたれてもいない。これと「中の中の小坊主」のお茶あがれとは近いのである。

それからもう一つ、このごろはあまり見受けぬが、箸はしとか紙縫こよりとかの尖さきを少し折曲おりまげた

ものを、くると両手の掌てのひらで揉み廻し、その突端の向いて止った方角の人に、盃を押しつけるという方式がもとはあつて、その囃はやし文句もよく似ていた。ところがこれと全く同じ遊びが地方では小児の遊びとして、最もひろく行なわれていたのである。

もとは全国にわたつて、ほとんど知らぬ児童もなかったらうと思う。おかしいことにはそれがことごとく、隠したおならの犯人を発見する目的のみに用いられていた。四国・九州ではそれ故にへりカノド、またはへりガンドともカネジヨとも呼ばれていた。そのカネジヨもカンドともに鉤かぎ殿で、その小枝や細い棒さが鉤かぎになつていたからの名であらうと、私たちは想像している。すなわちこの鉤をまわして占うらいをした目的は、最初は決して下品なものではなかつたのを、のちに酒飲みは盃をさす人をきめるために、子どもはただおならの主ぬしを見つける戯れだけに用いて、その他を忘れてしまったのである。上方かみがた方面の酒の席では、これをベロベロの神様といったことが記憶せられている。

ベロベロの神様は

正直な神さまで

おささの方おもむへ面向ける

面向けの

という囃し言葉を唱えつつ、なにか細長いものを手で廻したということであるが、それと同じ名前は関東・越後・奥羽地方まで通用していて、こちらはいずれもみな子どもの遊びであり、唱えことは、

ベロロ カベロ 正直神で

誰がへをひった

ひった方さつん向け（上総）

という類の文句になっている。或いはまた「ベロベロカメロ、とうといカメロ」などともいうところがある。つまりは初めに、まず鉤の霊の尊く正直なことを讃えて、それからいよいよその指定を求め、これによつて疑いを決しようとしていたので、少なくとも方式だけは、昔の神を祭った人々の所作を、そのまま守っているのである。無心な者のすることには、うっかり看過すことのできないものがいろいろある。

東北で小児がベロベロの遊びをするのは、たいていは樹きの小枝の鉤かぎになったものを折取おりとつて、それを両手の間にまわして、あのおかしな文句を唱となえるのだが、時としては萱かやとか藁わらとかの一本の茎くきを折曲おりまげてすることもある。ベロベロという言葉が最初からなにか滑稽こっけな意味をもっているように思う人もあるかは知らぬが、実際は決してそうでなかった。

長野県の北部などでは、正月の三日をベロベロの歳取としとりと称して、小枝でそういう鉤をこしらえて三方折敷さんぼうおしきに載せて神棚かみだなに上げておく家もあり、またはもう、そういうものは作らずに、ただこの名称だけを知っている家もあるが、とにかくこれには少しも戯れたわむの心こころもち

持もちは伴わぬのである。奥おうしゅう州しゅうの田舎いなかでは以前まだ定まつた墓地がない時代に、葬式

当日に行列の先に立つ者が、このベロベロを廻して送るべき方角をきめたという話なども残っている。非常に子どもらしい素朴そぼく過ぎた占うらないかただけども、前にはこうして右か左かの疑いをきめるといふ信仰もあったのではないかと思われる。

そんならどういふわけでその尊い、また正直な鉤の神にベロベロなどという名をつけたらうかという問題が起る。私たちの想像では、ベロベロとは嘗^なめることで、舌^{した}の田舎言葉^しをベロというのも、元^{もと}はそれから出ているのかと思つてゐる。今でも子どもがベロベロの神を廻すのを見てゐると、これを両手で高く口の前まで持つて来て顎^{あご}の下あたりで揉^もみ廻すので、ちょうど鉤のさきを鼻と見立て、その細い棒の後から、声が出て行くようにしてゐたようである。きわめて簡単なものだが、この鉤を一つの人^{にんぎよう}形のように見ることが許されてゐたのではあるまいか。

人形が今のように写真になつたのは、わが邦^{くに}でもそう古いことではない。東北で盲^{めくら}の巫^み女^こが舞^まわせてゐるオシラサマという木の神は、ある土地では布^{ぬの}で掩^{おお}つた単なる棒であり、また他の土地では、その木の頭に眼鼻口だけを描いてある。そうしてこれをカギボトケという名などもまだ時々記憶せられてゐる。信心な人たちの強いまぼろしでは単なる鉤ある小枝でも、なお有^{ありがた}難^{がた}い神の姿に見ることができたので、それを祭をする人の口の前に持つてくることが大切な条件ではなかつたかと思う。東京でオシヤブリ、関西でネブリコなどという木の人形も、これを轆轤^{ろくろ}でひいて今のコケシボコにするまでの、元の形というものがあつて、それがのちには幼い者の手によつて管理せられることになつたものではある

まい
か。

おもちゃの起り

玩具おもちゃを面白がつて集める成人が多くなつた割には、古いことがまだ一向わかつておらぬが、近年ブリキ・セルロイドが目まぐるしく新を競うようになるまでは、われわれのおもちゃは不思議なほど種類が限られていて、どうやらその一つ一つから根原こんげんを尋ねて行かれるらしく思われる。だいたい、以前の玩具はほぼ三通りに分けることができたようである。最も数多いのは子どもの自製、拾つてすぐ棄すてる草の実やどんぐりのようなものから苗株なえかぶあねごとか、柿かきの葉人形とかの、うまくできたならなるだけ永く大事ながにしてしまつておこうとするものまで、親も知らないうちに自然に調とえられる遊び道具、これを子どもは「おもちゃ」というものの中に入れていない。

オモチャという語のものは、東京では知らぬ者が多くなつたが、今も関西というモチヤソビの語に才をつけたものにちがいない。その弄もてあそび物を土地によつては、テムズリともワルサモノともいつて、これだけは実は母や姉の喜ばぬ玩具であつた。もつとも普通に使わ

れるのは物さしとか籠へらの類、時としては鍔はさみや針などまで持ち出す児こがあつて、あぶないばかりか、無くしたり損じたりするので、どこの家でもそれを警戒した。そうしておいおいとその代りになるものを、こしらえて可愛かわいい子には与えたのだが、最初はそれもただ親たちの実用品のやや小形のもの、たとえば小さな籠かごとか桶おけとか、箒ほうきや農具たぐいの類が多く、子どももまた成人と同格になったと思つてそれを喜んでいたようである。

それから第三には、買うて与える玩具、これが現今の玩具流行のもとで、形には奇抜なものが多く、小児の想像力を養うには十分であつたが、如何いかんせん、そういう喜びを味わう折が以前はきわめて少なかったのである。おみやげという言葉でもわかるように、本来は物詣ものまいりの帰りに求めてくるのが主であつて、したがつてその種類も限られており、だいたいにお祭に伴なうものばかり、たとえば簡単な仮面かめんとか楽器とか、または神社から出る記念品のようなものであつたことは、深い意味のあることなのである。その一つ一つについて話をしてみれば面白いのだが、それではあまり長くなる。ただここで私のいいたいのは、あんなオシャブリのような小さな玩具でも、やはり最初は、御宮おみやげ筈であり、すなわち日本人の信仰から生まれて、発達したものだつたということである。

木の枝の力

今の人には何でもない木の小枝の鉤かぎになったものなどが、昔は非常に重要にみられていたということは、必ずしも小さな発見ではない。金属工芸の進まなかった時代から、土を耕す鋤くわはすでに備わり、また火を焚たく炉の上の鉤も欠くべからざるものであった。これに天然に備わった物を用いようとすれば木の枝より以上に丈じょうぶ夫なものではなかった。すなわち昔の人たちは自分の体験によつて、つとに木の枝の強い力を認めていたのである。

三重県の北部から滋賀県の甲賀地方にかけて、春のはじめに神様を山から、里の方さとへ御迎え申す作法として、鉤かぎ曳ひきという神事がある。神木に張り渡した太い注連しめなわ繩なわに、木の鉤かを懸かけて歌をうたいつつ曳ひくのである。

東北地方では一般に、峠とうげ路みちの辻つじや入口にある大木の高い枝に、鉤かになった小枝を下から投げあげて引懸ひっかかるかどうかを試みる占うらいながあつて、時々は無数にその小枝の懸かつている樹きを見かけるが、それを鉤かぎ懸かけもしくはカンカケといっている。讃岐さぬきの小豆島しょうじまの寒か

霞溪んかけいもそれらしいから元もとはこの方面にも同じ風習があつたかと思われる。今日では小石を石の鳥居とりいの上に乗せて見ようとし、または沓掛くつかけといって、馬の沓くつや古草鞋ふるわらしを投げあげるようにもなっており、子どもや若い者の慰みなぐさくらいにしか考えられておるまいが、かつてはまじめに或る旅行の成功するか否かを、鉤によつてたしかめてみるという信仰があつたのである。

それよりも今一段と子どもらしい方法、したがつて今では子どもしか試こころみない戯たわむれに、鉤引かぎひきというものがあることは知っている人が多からう。東北ではこれも小さな木の枝の鉤で、それ故に主としてこれに用いられるしなの木などを、今も子どもは力ギヒコノキと呼んでゐる。この遊びをする日が、特に正月の松まつの内うちとなつてゐるのは、由来ゆらいの久しいことかと思う。他の地方に行くと春もたけてから、路傍ろばうの車おおばこ前の茎くきを折曲おりまげて引懸ひつかけ引張ひつばり、または葦すみれの花の馬の首のようになった部分を交叉こうさして、むしろその首のたやすくもげて落ちるのを、笑い興きようずるようになってゐるが、二つは最初から別々の遊戲であろうとも思われない。すなわち、子どもの遊びには遠い大昔の、まだ人間が一般に子どもらしくかつた頃に、まじめにしていたことの痕跡こんせきがあるのである。

念木・ねんがら

こういう話をしていると、自分の幼いころが際限もなく思い出される。秋の末に稲が刈^かり入れられて、水田の土がまだじくじくと柔かい時分に、日が暮れて寒くなるまで家に帰ることを忘れ、着物をよごして来てよく叱^{しか}られた遊びがある。関東ではひろくネツキともネンボウとも呼んでいるが、それがまた木の鉤^{かぎ}のさきを尖^{とが}らしたものを、柔かい田の土な^{うちこ}どの中に打^{うちこ}込んで、相手の立てたのを倒す遊びであつた。

ちようど片仮名のイの字を逆^{さか}にしたような棒で、現在は鉤の全く取れたただの木切^{きぎ}れを尖らせて打つ地方も多いようだが、私などは鉤が有るために面白く打てたのだと今でも思っている。庭や畠^{はたけ}で遊ぶと叱^{しか}られるから田へ行くだけでなく、全く刈^{かり}田^たの頃^{ころ}合^{あい}の柔^{やわ}かさ^{さが}を、捜^{さが}してでも子どもはそこへ集まったのである。打ちかたの巧^{こう}者^{しや}によっては自分のネンボウは深く刺され、同時に敵のをはね出して倒す。そうするとその棒をこちらへ取つてしまうのである。いろいろと工夫^{くふう}をして自分の得^え手^てに合うようなのを削り上げ、それに

は名前をつけておいたりする子どももある。勝った獲物を一二抱も三抱も、物置の隅にしまっておいて、風呂のしたに焚かれてがっかりした記憶も自分にはある。

この遊戯は以前は全国的のものであったのである。したがってそれを詳しく説明する必要はまだないかも知れぬが、ここで私の考えようとするのは名称であって、それが不思議なほど南北に共通しているのである。もともと東北の端の方だけは笄打ち、またはツクシ打ちという名もありその他にも少しづつちがった地方名はあるけれども、だいたいにおいてネンという言葉が行き渡っている。関東平野でもネン棒があり、またネン木と謂ったところもある。ネツキ・ネツクイは根本・根杭であろうと、字を学んだ子どもはおよそ想像しているが、実は枝のさきを切って作るので、ただ土の中へ刺し込む点が、根と呼ぶにややふさわしいだけである。言葉はこういう風に形と心持とが、別々に移り動くものであるらしく、また必ずしも、学者によって吟味せられてもいない。私の心づいたのは、このネンは別に起りがある。或いは念の字の音であって、やはり中古から言い始めたのかも知れない。そうするとこの名前よりも遊びの方が古く、またもう一つ前の名があつたにちがいないのである。

燈台もと暗し

いわゆる根^ねツ木^きの問題には限らず、我々がお互いに話し合ってみないために、覚るべきことを覚らずにいる場合はなはだ多い。私がこんな小さなことに力を入れるのも、目的はもつと自分の中にある「日本」を見つけ出してもらおうがためである。各地から寄り集まっている人々の話題を、できるだけ朗^{ほがら}かな楽しいものにしたいくからである。

まちがついていたら正してもらおうようになるべく多くの地名を掲げる。尖^{とが}った木の棒を土の上に突き立てて相手の立てたのを倒し合う競技を、関東とその周囲の県ではネツキという者が多く、またネンボウという名も伊豆^{いず}あたりまで行なわれている。それよりもつとひろいのは、北陸では能登^{のと}の七浦^{しつぷら}村などというネンガラウチで、ここでは村の鎮^{ちん}守^{しゅ}の御^おまつり祭の日の遊びだが、西の方に行くとそのただの遊びとなっている。たとえば鳥取市の附近の村でもネンガラ、ここでも稲刈^{いねかり}後の田へ出て遊ぶ。次には山口県の豊浦^{とよら}郡でもネンガラ、海を渡って筑前^{ちくぜん}の大島でネンガラ、これも遊びかたは同じだが、注意

すべきことには御産おさんのあつた家の前で、子どもがこの木を組んで産屋うぶやというものを立てるという。しかしもう一度尋ねてみなければ詳しいことは言えない。

それから西へ廻つて長崎県の下五島しもごとうにもネンガラ打ちの遊びがあり、さらに熊本県の天草下島あまくさしもじまでも旧十一月丑うしの日の山の神祭の前に子どもが、手頃てごろの木を伐きつて来て、このネンガラを作つておいて祭の日に遊ぶというのは、いよいよ信仰上の儀式であつたことを思わしめる。同じ遊びはまた阿蘇郡あその山村にもあるが、ここでは少しかわつてネンゴロといつてゐる。鹿児島県の甕島こしきしまへ行くと上甕かみこしきの方ではネンガラまたはネンガネ、このカネはベロベロの神をカネジヨというのと同じで鉤かぎのことらしい。下甕しもこしきの手打港てうちこうなどはこの遊びをネンウチ、それで遊び道具の方をただネンと呼んでゐるが、起りの一つであつたことは疑いが無い。昔は九月九日の節供せつくの日の子ども遊びであつたというが、今ではもう常の日にもすることがあるらしい。奄美大島あまみおおしまのような遠い島にも、やはり古くからそのネンウチの遊びはあり、その木をネンと呼び遊びかたもよく似ていた。人のネンを打倒うちたおして手の幅一つだけ離すことができれば、それを取つて自分のものとしたという。ただこれらのネンを絵にかいたのを見ると、関西各地のものには私たちの重要視している鉤の枝のないものが多い。いつからなのか考えてみたいと思つてゐる。

ねぎこと

ネンウチは念^{ねん}打^{うち}と字に書くのが本^{もと}の意にかなうものかと思う。或いはあまり念が入りすぎるかも知れぬが、もう少しばかり他の土地の例をならべると広島県の海岸地方にも、ネンがありまたネンウチの遊びがある。倒して相手のネンを取るほかに、はじめから下手^{へた}で地面に立たなかったものも次の番の児^この所得になる。どういうわけか、それをグツソウと子どもはいつている。ネンギリという名前が備後^{びんご}の府中などにはある。打つという代りに切るともいつていたのか、或いはまた別の言葉だったかも知れぬ。豊前^{ぶぜん}の築^{ちく}上^{じやう}郡などではこの木の棒をネンギ、伊予^{いよ}の宇和島^{うわじま}ではこれをキネンといい、またネンガリともいうのは日本海側のネンガラと似ている。

近いところでは神戸^{こうべ}にも、このネンガラという語が行なわれていた。現在はもう木を尖^{とが}らしたものでなく長さ四、五寸の鉄の棒の、さきの尖ったものを用いるというが、もちろん今はもう見られぬであろう。私などもまだ播^{ばん}州^{しゅう}にいたころ、大きな西洋釘^{せいようぎ}に紙の

総ふさを附けたものを、地面に打うち付けているのを見たことがあるが、危あぶないといって持つことを許されなかった。しかしああいふものではとても関東などの根木打ねつきうちの面白さは味わえなかつたろう。以前の競技は青年も加わり、それよりもっと複雑な、かつ興味の深いものではなかつたかと思う。

有馬郡有野ありまありのの唐櫃神社からとに伝わっているネングイというものなどは、正月二日の鬼打神おにうちしん事じの一部で、はじめに的射まといの式があつてその終つた後、弓を地上においてその弓弦ゆみづるの前と後とに、櫛はぜの木で作つた杭くいを六本ずつ二度、合せて二十四本打ちこむ。閏年うるうとしには二十六本、すなわち十三本の倍数を打つというから、多分はこれに由よつて月々の吉きつぎよ凶うまたは晴雨ぼくを卜したのだらうと思うが、現在はもう自信がなくなつたものか、それぞれ適當の場所に手を持ちそえて刺しこむことにしている。そういった変化は他の土地の、的射の式などにもおりおりに見られる。

つまりは成人の間ではただ形だけを残し、その面白さの方は子どものみが相続しているのである。尾張おわりの知多半島ちたなどでこの遊びをネギゴトといい、それに使う木の棒をネギねぎというのも、同じ念木ねんぎという語の地方音だったかも知れぬが、別にこれを願ねがいごとまたは禰ね宜事ぎことと解してもよいような感覚がなお残つていて、二つの心こころもち持もが融合したものとみら

れる。ことに小児は単純だから、毎度こういう思いちがいをしやすいのである。

弓太郎と念者

弓箭ゆみやは農民の間では早くから、神祭の折にしか用いられていなかった。従つてその技能は劣つていて、實際の役に立たなかつたのである。私の知つてゐる三河の或る山村では、うしがみ氏神の祭礼に金的きんてきを射あてる神事がある。箭やが的まとを射貫くとの場的まどばの土といつしよに的と箭とを三方さんぽうの上に載せて神前に供え、それをもつて祭を終ることになつており、祭の前にはみな一生懸命に弓の稽古けいこをする。もし中あたらなかつたらどうしますかと尋ねてみると、何日でもあたるまでは御祭おまつりが続くのだそうである。しかしどうしてもあたらぬ時には仕方がないから、神主かみぬしが箭を持つていつて、金的に突射つきさすのだという話であつた。

四国や九州で百手祭ももてまつり、または御射おまといの神事といつてゐるのは、的も大きく距離も近くしてあるようだが、射手いはたいていの場合には少年であつて、みな前々から精進しやうじんをして練習する。そうして各自の部落を代表して、あたればその村が神の思召おぼしめしにかなひ、一年中の仕合せを取るとしてゐたのだから、周囲の人たちも今日の声援団以上に力ちから瘤こぶ

を入れたのである。的射に出る少年選手は弓太郎などと呼ばれ、それを出す家には親類から祝い物を贈ってくるような土地もある。式場には多くの人が出席して、世話をしたり力をつけたことは無論である。朝廷や京都の大きな御社おやしうにも、中世以前からこれとよく似た賭弓のりゆみの御式おしきがあつて射手は右左に分れて勝負を競うほかに、おのの一方の声援者があり、それを念人ねんにんといつていたことは記録にしばしば見えている。すなわちめいめいの選手が勝つことを、心の中で念ずる役である。

少年の箭数問やかずい寄る念者ねんじやぶり

という近世ほつくの発句があるが、その念者もまた元もとは右にいう念人と同じであつた。われわれのネンボウ・ネンガラ遊びには、もはや年を取つた念者の来て見る者は無くなつていたけれども、仲間なかまがこの勝ち負けに力を入れる熱心さは、純然たる遊戯になるまでなお残つていて、それが暗々裡あんあんりに競技の興奮を忘れがたいものにしていたように思う。相撲すもうとか競馬とりあわとか鶏合せとかのごとく今まで成人の念者がたくさんに押掛けるもの以外に、盆ぼんや正月つなひの綱曳つなひきのように、ちようど成人から子どもへの過渡期にあるものもあれば、さらにま

たこのネン打ちや、次にいいたいと思うハマの遊びのように、ほとんど子どもだけしか面白がらぬ競技もあって、それがことごとく最初は神様の祭から出ていることは、子どもを愛する人々の回顧せずにはいられぬ歴史である。

大人から子どもへ

児童に遊戯を考案して与えるということは、昔の親たちはまるでしなかったようである。それが少しも彼らを寂しくせず、元気に精一ぱい遊んで大きくなっていたことは、不審に思う人がないともいわれぬが、前代のいわゆる児童文化には、今とよっぽど違った点があったのである。

第一には小学校などの年齢別制度と比べて、年^{とし}上^{うえ}の子どもが世話を焼く場合が多かった。彼らはこれによつて自分たちの成長を意識しえたゆえ、悦^{よろこ}んでその任務に服したのみならず、一方小さい方でも早くその仲間に加わろうとして意気^{いき}こんでいた。この心理はもう衰えかけているが、これが古い日本の遊戯法を引継^{ひきつ}ぎやすく、また忘れがたくした一つの力であつて、御蔭^{おかげ}でいろいろの珍しいものの伝わっていることをわれわれ大^{おお}供^{ども}も感謝するのである。

第二には小児の自治、かれらが自分で思いつき考えだした遊びかた、物の名や歌ことば

や慣行の中には、何ともいえないほど面白いものがいろいろあつて、それを味わつてゐると浮世を忘れさせるが、それはもつと詳しく説くために後まわしにする。

第三には今日はあまり喜ばれぬ大人の真似、小児はその盛んな成長力から、ことのほか、これをするに熱心であつた。昔の大人は自分も単純で隠しごとが少なく、じつと周囲に立つて視^みつめてゐると、自然に心持^{こころもち}の小児にもわかるようなことばかりをしていた。それに遠からず彼らにもやらせることだから、見せておこうという気もなかつたとはいえない。共同の仕事にはもとは青年の役が多く、以前の青年はことに子どもから近かつた。故に十二、三歳にもなると、子どもはもうそろそろ若者入りの支度をする。一方はまたできるだけ早く、そういう仕事は年下^{としした}の者に渡そうとしたのである。今でも九州や東北の田舎^{いなか}で年に一度の綱曳^{つなひき}という行事などは、ちょうどこの子ども遊びとの境目^{さかいめ}に立つてゐる。もとは真面目^{まじめ}な年占^{としうらな}いの一つで、その勝ち負けの結果を気にかけるくせに、夜が更^ふけてくると親爺^{おやじ}まで出て曳^ひくが、宵^{よい}のうちは子どもに任せて置いて、よほどの軽はずみでないと青年も手を出さない。村の鎮守^{ちんじゅ}の草相撲^{くさずもう}や盆^{ぼん}の踊^{おどり}などもみなそれで、だから児童はこれを自分たちの遊びと思ひ、のちにはそのために、いよいよ成人が後へ退いてしまふのである。

小児の役目

子どもが大きい人から引継ひきつがれた行事と、単なる彼らの遊戯との境目さかいめは目に立たない。ただ年月が経たつて一方がもうその重要性を認めず、おいおいに起りを忘れてしまうだけである。中なかの中なかの小こ仏ななや念打ねんうなどはよい例だと思うが、今一つだけもう少し手近いのを挙げると、畠はたさく作さくに力を入れる東日本の農村などでは、もぐらもち（オゴロモチ）の害にはいつも弱りきっている。見かけたらすぐに退治するが、それだけではとても追いつかぬので、春の初めの一ばん好よい日、すなわち正月十五日の早天に、もぐら追いということをしてあらかじめ一年の害を防いで置こうとする。棒で肥こえ桶おけの腹をこすってキーキーという音を立て、耕地の上を転がしてまわると鼯もぐら鼠ねずみが遁にげるといつて、関東・信越の田舎いなかでは、今でも農家の主人が出て行つて、このまじないをする風もあるが、別になお一つ簡便な方式を行なっている村もある。この小獣なまこが海鼠うみねずみの香かを嫌うということは経験であつたらしい。それでこの物を繩なわの端はしに括くくりつけて、畠はたさくを引張ひっぱりあるく風習もひろく行なわれており、そ

の時^と唱^なえる文句が愉快なので、小児が志願してその役につく場合も多かった。必ずしも効果があると信じているわけでもあるまいが、久しい仕来^{しきた}りだから、これをせぬと気になるためだろう。いまでも子どもの無い家からは親爺^{おやじ}が出てそれをやっている。海鼠^{くも}が手に入らぬと、その代りに横槌^{よこづち}などを引きずり、または東北ではトウラすなわち手束^{たわし}を曳^ひくところもある。これは海鼠の一名をトウラゴというから代用になると思ったのかも知れぬ。

ところがこの海鼠引きが、多くの土地ではもう純然たる正月遊びになっている。たとえば東北では仙台・気仙沼^{けせんぬま}など、西では近江^{おうみ}の彦根^{ひこね}でも、また京や大阪のちつとも鼯鼠^{くも}などはいない大都市でも、やはり小児が町中を押しあゐいて、

おごろもち^{みまい}はうちに か　とうらごどんのお見舞^{みまい}じや

おるす　おるす

というような文句を節^{ふし}おかしく唱^とえる風習が近い頃までであった。九州各地の正月のもぐら打ちのごときも、

もぐらえい、とんとこせ 隣のせつちんもりくやせ（日向が）

という類の文句は稀に残っているが、今ではすっかり果樹の豊産を祝う式となつて、小児はただ竿で地面を叩いて喜んでゐるだけである。

鳥小屋の生活

正月はむしろ子どもには多忙な月であつた。食べねばならぬし、遊ばねばならぬし、そのほかにさらに頼まれてする仕事かもとは幾つともなくあつたのである。そういう中でももぐら鼯鼠駆除のなまこ引き以上に、もつと子どもがおよろこ大悦びで引きうけた役目は鳥追いで、その日の面白さは、白髪しらがになるまで忘れずにいる者が多いのである。その理由の一つは、どんな大きな声で耳の割れるほどわめいてもよかつたこと、それから今一つは子どもばかりで、二夜も三夜も屋外の仮小屋に、親を離れて寝起き飲食するということであつた。楊やなぎや白膠木ぬるでの木を削つていろいろの飾りをつけた祝い棒がこのために銘々めいめいに与えられる。それでたんとんと横木をたたいて、心まかせに鳥を追う詞ことばを唱えるのが、いわゆる鳥小屋の生活であつた。それ故にこの小屋をまたワアホイ小屋・ホンヤラ堂などという類たぐいのおかしな名で呼ぶ土地が多いのである。ワアホイはもちろん鳥を追ひ散らすおどしの声、ホンヤラも後から駆り立てる声だつたとみえて、二月・十二月の風の神送りなどにも、こうい

う囃^{はや}しを用いている例がある。ただ正月の雪の中では、まだ駆逐すべき害鳥が眼の前にはいないのだから、当の本人たちがかえって言葉の意味を理解せず、今はもうむやみに興奮して騒ぐだけになっているのである。

村の鳥追いの詞は誰が考えだしたかしらぬが、よほど古くから今あるものが行なわれていた。それを少しずつ子どもはまちがえて歌うのだが、

朝鳥ほほほ 夕鳥ほほほ

長者どのゝ垣内^{かうち}は

鳥もないかくちだ

やいほいはたばた

こういつた文句が東北には広く分布する。そうして現在でもやはり朝早くと、日の暮れ方とはことに大声でわめくことになっている。山形県の海岸一帯から越後^{えちご}の粟生島^{あわぶしま}あたりにかけて、この「夕鳥」をまたヨンドリほいともうたい、それで小児が手に持つ木の棒を、ヨンドリボウと呼んでいる土地がある。名前は土地ごとというほど変っている

が、日本全国どこすみの隅に行っても正月はこの棒を持たぬ子どもではなく、しかも鳥追い以外にもこの棒の大きな力は、一般に今なお承認せられており、それで彼らはまた正月の任務を欣々きんきんぜん然として引受けていたのである。

祝い棒の力

小児は全体に木切れきぎを持つて遊ぶを好み、それを持つとかならず少しばかり昂奮こうふんする。なんでもないことのように我々は考えがちだが、実は隠れたる由来ゆらいのあったことかも知れぬのである。ことに目にたつのは正月の十五日前で、これを子どもが持つと、ちようど神か主ぬしさんの笏しやくや扇子せんすと同じく、彼らの言葉と行ないに或る威力がある、という風ふうに昔むかし者のは今も感じている。単に目に見えぬ害鳥虫をあらかじめ駆逐し、または果樹たを叩たたいてその木を豊産になしえたのみならず、若い女性の腰を打てば、みごとな児こを生むとさえ信じていた時代があつた。だから、

大だいの子小この子十三人 云々うんぬん

という歌があつて、この祝い棒をダイノコと呼ぶ土地もあり、または、

男ぼっこ持ちやがれ

などという悪口に近い詞さえもあった。東部日本ではヨメツツキまたは嫁叩き棒、九州の各地でハラメン棒、対馬でコツパラなどといったのも、すべてこの正月の祝い棒の名で集めているときりがないが、いずれもこの木切れに女を孕ませる力があると思っていたからの命名である。祝い棒にはいろいろの装飾が施されていた。色紙を貼ったり彩色をしたり、または左巻きと称して樹の皮を巻き、燻して型をつけたものもあるが、最も古風なのは精巧な削り掛けがしてあった。それを手に執ると、実際もう常の心ではおられなかったのかと思う。

鹿児島県の一部などでは、この棒をダシヤレ棒ともいつている。大歳または十四日の年越の晩に、家々の門に来てこれを振りまわし、ダシヤレダシヤレ、またはハラメラデーセ、すなわち孕み女を出せとわめくのである。現在はたいていお菓子や餅を与えて帰すだけだが、固い家では表口に俵をならべその上に花嫁を坐らせて、尻を打つまねをし、もらう土地も他県にはあり、または子のないのを歎く女が、所望して打ってもらうと

いう例さえ稀まれにはあつた。『枕草子まくらのそうし』には宮中の人たちが、隠れて女を打とうとしたことが面白く書いてあるが、無論こういう行事は戯たわむれになりやすく、小児はまた決していたずらいたずらなつたのである。あるいは粥杖かゆづえというので別もののごとくにも見えるが、それもまた一つの祝い棒の役目から出た名であつた。

力あることば

正月十五日の前の晩に、子どもが人の家の前に来てわる口を言う風習が、稀^{まれ}にはまだ農村には残っている。羽^う後^ごの飛^と島^{びしま}などではそれが必ず両の手に一本ずつ、ヨンドリ棒を持つていてすることにきまっていた。家の男女の一年間の隠^{かく}しごとを、随分と露骨にいつてしまうのだが、それを黙^{もく}って囲^い炉^ろ裏^りばたで首を垂れて聴^きいているのだそうである。小児はもちろん人の秘密などは知らない、または片はし知ってもそれを言い現わす言葉はもたない。だから若い衆などがついて来て、小声でその文句を授けるのが例であったというが、そのようにしてまで小児の口から、常は言わないことを言わせていたのは、つまりはこの正月の祝い棒の力を認めていたからであった。

早川孝太郎君の『飛島図誌』に、このヨンドリ棒の絵が出ている。鳥追いの日が過ぎると背戸^{せど}の樹^きの下などに、その毎年の棒を積み重ねておくという。ヨンドリ棒については言ってみいたいことが色々あるが、子どもに関係がないことだからごくざっと述べると、この

棒の材料は桑くわの木で、上端を削って眼鼻口を描いたのが、我々の問題になっているオシラサマとよく似ている。奥おうしゅう州でオシラサマという木の二本の切れを持って、神の言葉を伝えるのは小児でなく、イタコまたはモリコと称する盲目の婦人であるが、この二つの間には共通点があるのみならず、小枝の鉤かぎになったペロペロの神、一名カギボトケというものも元もとは同じ目的に使われた。それが今はただ児童のあてもない遊戯の中に、幽かすかな残形とこを留めていたのである。

大人おとながこういうことをするのはもう阿呆あほうらしくなって、自然に子どもの真似をするのは放任したという場合もあったと思うが、別に最初から小児を適任とし、彼らに頼たのんでさせたという行事も、一部にはたしかにあったのである。たとえば年取おぼった者ならまだ憶おもえているだろうが、近畿とその周囲の昔かたぎの家々で、正月元日の朝の起きぬけに、特に彼らをして言ことわしめた詞ことば、

ゆの木の下のおん事は

さればその事ことめめででとう候そうろう

という問答などは、意味は分らぬなりに久しく守られていた。私たち兄弟も元はそれを言
ったことがある。そうしてなんだか大切なものであったように今にいたるまで印象づけら
れている。

ゆの木の祝言

『日本外史』を読んで、笠置^{かさぎ}の山の行宮^{かりみや}の御夢に、二人の童子が現われて楠^{くす}の樹^きの下を指^こざし、爰^{こゝ}ばかりがせめて安らかなる御座所と、御告げ申したという記事に接するごとに、いつも子ども心には、あの「ゆの木の下の御事」を聯想^{れんそう}せずにはおられなかった。そうしてこの二つはまるで関係のないことではないように、今でもまだ考えられるのである。ゆの木を私たちは柚子^{ゆず}のことかと思つたので不審であつたが、これを土地によつては、

やなぎの下のおん事は

と言わせていた家もある。ユというのは「ゆゆしい」などのユで、元^{もと}は齋^{いみ}の木または祝いの木のことであろうから、或いは最初門松^{かどまつ}などの下に立たせて、子どもにめでたいことを唱^{とな}えさせる習いがあつたのかも知れぬ。信州の松本などには、盆の七日にも柱を立てて、

その柱の根もとに一人の児こを坐すわらせて、祭をしたということが、たしか天野氏の『塩尻しおじり』に見えている。神の依よりたもう木から我々の中へ尊い言葉を伝えるのが子どもの役であり、それがまた正月の御祝い棒に言葉を神聖にする力が籠こもると思った古代人の理由かと思う。

しかし小児はそんな古い由緒ゆいしよを知らない。それに親たちの心こころもち持までは呑みこめぬ者が多いので、いつしかこの特権は濫用らんようせられるようになった。一方にはこれを詮せんもないことだとあざ笑うような気風も、夙はやく文化の中心地には起つていたのである。安楽庵あんらくあん策伝さくでんの『醒睡笑せいすいしょう』は、元和年間げんなに書き上げたという笑話集だが、その中には「祝ひ過ぎるも異いなもの」という題で、そのような例が数多く出ている。

曰いわく鍛冶屋かじやの長佐といひて西洞院にしのだういんにありし。物いはふこと人に過ぎたり。年の暮に孫の七八つなるを近づけ、元日にわが顔を見、日本のかなとこは皆ぢいのかなとこぞといへねんごと懇ろに教へし。あくる朝、やれ松千代まつちよ、昨日きのうのことはといふ時、日本のかなしみは皆ぢいのかなしみやといへり。

今でもこれに似た笑い話は、ぼつぼつと生まれつつあることと思う。無心な小児の言葉には思いがけぬ啓示のあることも事実だが、あんまりそれに重きをおいていると、時々は興のさめるようなことにも出遇であうので、まして西洞院の鍛冶屋の隠居のように、わざわざ

工作を加えたのはたいていは結果がよくない。ところが昔の村の人たちなどは悠^{ゆう}長^{ちやう}で、
そう大して気にもかけずに子どもにはいいたいことをいわせて、おかしいことをいえばた
だ笑って、古い仕来^{しきた}りの少しずつ変って行くのを、自然のままにまかせていたのだから面
白い。おかげでまだ色々の昔が子供の間に残っている。

千艘や万艘

東北では正月の春田打ち、または田植と称する行事が、土地によつては今もまだ少年少女の領分である。

明き^あの方から早乙女^{さおとめ}が参つた

といたり、または、

田人^{たうど}に来たよ　小苗^{こなえ}ぶちが来^きいた

などといって、彼ら自身もなんのことだか知らずに、ただまわつてあるけば餅^{もち}が貰^{もら}えるものだと思っている。それに相應の受け答えをして、心よく用意の餅を出して与えるのみか、

それが来なくなるのをなんとなく淋しく思っている家もまだ多い。正月はもちろん田植の季節でないが、もとは一年のはじめに一通りそのわざを演じて、農作成功のまじないとする風があつて、それには外部からこういつて来る者のあることを、一つの瑞相として歓迎したのであつた。ところが他の土地ではもうそのための職業団体ができたり、または貧しい人たちが顔を包んで、門に立つたりすることがはじまって、なんだか品の悪いものとして、親も学校も制止するようになり、子どもの正月の楽しみはまた一つ失われた。

これと似よつた例は四国の粥釣りや御祝いそ、中国地方のコトコト・ホトホト、またはトロベイ・トヘイなどというもの、九州・奥州の両端にあるカセドリなど数えきれぬほどの種類を私は知っている。起源は少しずつちがつているかも知れぬが、いずれも正月に子供の口から、めでたい言葉を聴こうとした趣意は一つで、もしもはじめから賤しいと見られる所作であつたら、真似をするはずもないのだから、いわば児童はお株を取られたのである。

もとよりこの変化は近ごろのものではない。東京などでもまだ江戸といった昔、町の子どもが数人で小さな船の形をしたものをかかえ、商家の店さきに来て入船の祝言を唱えていたということが、多くの書き物に残っているが、これなどもやはりいろいろの段階にお

いて今も諸国の船着場ふなつきばには行なわれている。たとえば津軽つがるの鰺ヶ沢あじさわの柱かつぎ、筑前ちくぜん博多のセンザイロウなどはまだ子どもの管轄かんかくに属している。そんな話を聴きけば珍めづしがるだろうが、東京人の中でも小さな児こをかかえゆさぶって、

千ぞや万ぞ　お船はぎつちらこ

などと唱えているのが、やはり古い文句の記憶であり、幼い者がそれを楽しんでいるのも、幽かすかながらその相続であつた。

猿ちづこ問答

今は東京市内になった高井戸あたりの子どもが、もとは甲州街道に出て富士登りの道^{どうし}者に、

お撒き^まやれお道者^{おやま} 御山の天気もよかろうに

と、銭^{ぜに}を撒くことをねだり、もし撒かずに行くと後から、風吹け雨降れというような悪口をしたということが、百年ばかり前の紀行に見えている。百年も以前に行なわれていたものならば、古来の風習だろうと即断する人がないとは言えぬが、私には一つの零落^{れいらく}の姿としか思われない。見ず知らずの旅人が村を通って、遠くへ物詣^{ものまい}りをするような場合がそう早くからあったはずもなく、またどこに行っても見られる出来ごとでもないからである。なにかもとづくところがあったろうとまでは考えられる。しかし少なくともこういう

いやなことをするようになったのは、別に新たな誘因があつたのである。

しかも道行みちゆきの多い街道筋かいどうすじ、ことに大きな神社や霊場に参詣する路みちでは、今も時々は旅客たもとの袂ほどこについて施しを求める風儀が残っているぐらいで、もちろん江戸近郊だけの特例ではなかつた。私などがこれについて思い出すのは『参宮名所図会さんぐうめいしよえ』にも出ている「さるちご問答」その他、旅人が最初馬鹿にしかかつた路傍の小児から、あべこべに遣りこめられるという話で、わが邦くにではこれを西行上人さいぎようしやうにんや宗祇法師そうぎほうしの逸話として、妙に数多く各地に伝えている。知らぬ人も少なからうがこの例を一つだけ挙げておこう。伊勢いせでは櫛田川くしだがわのほとりのある村で、可愛い童子かわいが樹きの上にいるのを見て、

さる稚児ちごと見るより早く木に登り

と口ずさんでいい気になっていると、すぐにその童子が下しもの句をつけて、

狗いぬのようなる法師来たれば

とやり返したので、ぎやふんと参つて早々に遁げ去つたという話。その「さる稚児」は今ならば目に立つほどの美少年とでもいう言葉だが、それを猿に引掛けて木に登りとからかうと、一方また猿に対して狗といった、つまりは平凡なただの口合ひではあるが、「狗のような法師」はあのころのはやりで、旅の連歌師などが自らを嘲る言葉だったからおかしいのである。児と法師との多くの問答は、いずれの土地の伝説でも、皆かならず前者の勝利をもつて結ばれている。その賢しい童児は実は神様の化現であつたなどというのを見ると、単なる民間文芸の趣向ではなしに、或いはもと路ばたに出て旅の参詣者に呼びかけるような宗教的の職業に、子どもが参与する慣わしがあつたのではないかと思う。

公認の悪戯

味をしめるということが、よく子どもについてはいわれる。子どもには自製の念が乏しいのは当り前だから、してもよろしいとなるとたいていのうまいことが、癖にもなれば流行にもなりやすい。悪戯いたずらに独創のものが少ないのもそのためであつた。

大阪郊外の村里などにも、八月十五夜の団子突だんごつきがつい近ごろまであつたが、あれは全国的といつてもよいほど、各地の子どもに知られている悪戯であつた。細い長い竹竿たけざおのさきに、縫針ぬいばりや釘くぎなどを附けたものさえ関東にはあつた。それを垣根すきの隙からそつとさし入れて、縁端えんばなのお月見団子を取つて行くのである。中には家の人たちがいる前で、さして来てやつたと自慢する子がある。取られた家でも笑いながら代りを補充したり、または十五夜団子は盗まれるほど好よいと言つたり、その盗んで来たのを貰もらつて食べると、何かのまじないになるという人さえあつたのだから、面白くてたまらなかつたわけである。

一方にはまた御手本といつてもよいものがあつた。村に嫁迎よめむかえがあると若い衆はよく

酒をねだる。これを樽たるい入れ、笊ざる転がしなどといって、そつと背戸口せどぐちから空の容器もちこを持込み、知らぬ間に持つて行くのが普通だったが、或いは竿さおのさきに樽たるいを結ゆわえて、高塀たかべいの外からぶら下げるといふ例も多く、熊野くまのなどではこれを釣瓶つるべさしと呼んでいた。これも家の方では快く入れてくれるのだが、顔を見られまいとするとところに一種の冒険味があつた。子どもはおそらく狩猟のような気持でそれを羨うらやみまた真似まねたものであろう。

取られる側からいうと一種の豊富感、余つて誰にでも遣やりたいという幸福を、味わいたい際なのだから、相手が容易よういに悦よろこぶ子どもならば、なおのこと取らせてやりたかつたであらう。

千葉県の農村などは苗代なわしろの種蒔たねまき日に、子どもは焼米袋やきこめぶくろといふのをこしらえてもらつて首にかけて村中をもらひあるいた。雛ひなの節供せつくにお雛はん見せとくれといつて来る子どもは、昔も今も炒豆いりまめや菓子が目あてであつた。関西ではこれを雛荒しという土地が多く、愛知・岐阜の二県などは、ガンドウチという名が今もまだ行なわれている。ガンドは中世語で強盗のことだから、まず極端なる誇張であるが、以前は断りなしに雛ひなの供物くもつを取つてゆくのが、子どもには何よりの楽しみだったらしい。やれガンドウメなどと笑いながら、勝手に炒豆や菓子をつかんで行かせた、昔の人の心持こころもちは気楽でよいと思う。

左義長と正月小屋

公認せられた子どもの悪戯いたずらというのが、今日はちつともなく、以前は相応にあつたことは、可否は別として、ともかくも世の変り目である。復活させたくもないものは無論幾つかある。そういう中でもわれわれ外部の者の眼に、やや憎らしくも思われるのは正月小屋の生活、ちょうど左義長さぎちようをやく前後の少年の跋扈ばっこであつた。道祖神さえのかみの勧進かんじんと称して木竹藁わらを集めあるき、少し出し惜しみをするとすぐに悪口をする。そういう悪太郎が仲間では、幅をきかしていた土地も稀まれでない。

もつとひどいのは通行人に銭ぜにをねだり、道路に縄なわを張つてその縄に泥を塗つておくというのさえあつた。甲州の道祖神祭さえのかみまつりのごときは、その我儘わがままがことにはなはだしく、これには面白づくで青年も多数に参加していた。小屋のある場所には御山木おやまぎまたは歳神としがみばし柱しらという木を立て、これから綱を引いて家の炉の鉤かぎに、それぞれ結びつけて置くという村も多いが、憎まれている家では飯時めしどきにやたらにこの綱を揺ゆるかされて鍋なべも薬罐やかんも掛けて

おくことができなかった、というような話も残っている。

そんなことまでして叱^{しか}らなかつたのは、正月ばかりは子どもらが神主^{かんぬし}さんだから、と
いうような考えがまだ幽^{かす}かに伝わっている土地が多いためであつた。そんなら何^{なに}神様の
神主かと問うと正月様だという人もあり、道祖神と思つてゐるものもあつて、結局はつき
りしないが、石城^{いわき}郡の海岸一帯などには、七小屋参りと称して七つの小屋を巡拝し、ま
たはその小屋を焼く以前に年寄^{としより}たちが、御賽^{おさい}銭^{せん}をもつて御参りする村があるのである。
それを怠る者がだんだんと多くなつて、いよいよこの小さな神主さんが荒れ出したのであ
る。

左義長は関西の方ではただ飾り物を焼く行事のようになってゐるが、それでもまだ少年
がこれを自分の事業のように心得ている。中部地方から関東では一般に、大か小か一つの
小屋を掛けて、その中には神壇^{しんだん}を設け燈^{とう}明^{みょう}供^く物を上げ、子どもの仲間^{なかま}がその中で寝
ることを「おこもり」といつてゐる。愛知県などでは旧十一月の山神^{やまのかみまつり}祭に同じ事を
するようだが、共に十五日の早^{そう}暁^{ぎやう}にその小屋を焼くことをもつて、祭典の終りとして
ゐることは一つである。私が今住んでゐる多摩川一帯の農村においては、この正月行事を
サイト焼^{わら}というが、藁^{わら}で作つたサイト小屋はどの村の八^{はち}畳^{じやう}敷^{しき}ほどの大きさであつた。

そこへ三つの団子を樹の枝の三つ又またにさして、参詣さんけいかたがた村の人が焼きに來るのである。

支那事變が始つてから、遠慮をしてやめたものが多いが、ある一つの部落などは子どもが寝ているのを知らずに、その小屋に火をかけて、かわいそうなことをしたので、その翌年からやめてしまった。ともかくも今はもう正月小屋の末期まつきである。

こども組

正月小屋の中では、おかしいほどまじめな子どもの自治が行なわれていた。或いは年長者のすることを模倣もほうしたのかも知れぬが、その年十五になった者を親玉または大将と呼び、以下順つぎに名と役目とがある。去年の親玉は尊敬せられる實力はなく、これを中老だの隠居だのといっている。指揮と分配とは一切が親玉の権能で、これに楯たてつく者には制裁があるらしい。七つ八つの家では我わがまま儘な児こでも、ここへ来ると欣々きんきん然として親玉の節度に服している。これをしおらしくもけなげにも感ずるためか、年とつた者は少しでも干渉せず、実際にまた一つの修練の機会とも認めていたようである。

この子ども組の最もよく発達しているのは、信州北部から越後えちごへかけてであるが、他にも飛び飛びにこれが見られる土地は多い。古くからあったものの消え残りのようにも考えられるが、それにしてもあまりに他の地方に痕跡こんせきがなさ過ぎる。何か基づくところはあったにしても、それがこの程度まで制度化したのには、別に新たな原因が加わっているの

ではないか。興味の深い問題だと思う。

一つの想像は青年団の影響である。十五は昔から男が一人前になる年であつたが、若い衆の資格が追い追いとむつかしくなつても、実際はまだ何年間かの準備期間が必要であつた。中老などと子ども組ではいばつていても、若連中わかれんじゅうに入つては使い走り、だまつて追いまわされていて一向に頭が挙あらない。かれらの側からいうと、ここでまた一回の努力がいるのである。そう思つて見るときは、子ども組の活躍が何か若連中に加わる目的にばかり、集中しているようにも見られぬことはないのである。

かれらが無心なる年少者の群と、正月十五日の自由とを利用して、成人を笑わせようとする歌言葉の中にも、そういう形跡はたしかにある。正月は花やかに笑うべき月であり、また笑うとすればいずれこの辺のところに落ちるだろうが、かれらは思い切つて成長した男女の問題を、大きな声でわめこうとしていたのである。すでに一人前の知識・感覚を持つてゐるぞということを示そうとする態度がよく見られる。穩当おんとうでないか知らぬが親も祖父も、みんな一度は通つて来た関門であつた。それがただ少しずつ濫用らんようせられていただけである。

女兒のままごと

あんまり男の子の荒々しい話に片よったから、今度は方面をかえて「おままごと」の問題を考えてみよう。この遊びが日本では特別によく発達しているということを、皆さんは多分まだ心づいておられぬだろうが、同じ年をとった人たちの所作しよさを真似るという中でも、ままごとのお手本はそう手近いところにはないようだ。そうして男の子の鳥追いやもぐら打ちと同様に単なる遊戯という以上に、まだ一部分は村の公務といってもよい状態が残り伝わっているのである。

これを発見するには最初にまずこの遊びに、季節または機会があるかどうかを注意して行くのがよいかと思う。カマクラと称する秋田県の雪小屋などは、以前の鳥追歌とりおいうたや御火おほた焚棒きぼうがまだ残っているにもかかわらず、今では女の児こが火鉢ひばちなんか持込んで、静かに煮炊にたきをして楽しむ場所になっている。他の地方の正月小屋でも、餅を焼いて食べ、または世話をする宿があつて、子どもばかりの食事をするのが彼らにとっては重要な事務であつた。

ただしこれだけは女の子を入れない。

或いは天竜川筋の雛送りのように、三月節供せつくの日に川原に蓆むしろを敷き、火を焚たいて飲み食いを中心にした少女の集まりがあるが、もとは東京の近くの馬入ばにゅうがわすじ川筋の村にもあった。ままごとの地方色はいろいろある中に、若狭わかさの常神村つねかみなどでカラゴトというのが、やはりその川原事かわらごとであつたらしい。ただし三月の雛遊びの日に限らず、盆に川原に出てかわらがゆ川原粥・川原飯を炊いて食べる方が、むしろずっとひろい風習であつた。

場所は川原でなくとも磯いそばた・海のほとり、または遠くの見える丘の上・橋の袂たもとなどを選ぶこともあつた。とにかくに屋外で食べるだけでなく、調理までをするというのが一つの特徴で、それによつて辻めしつじ（美濃みの）、門飯かどめし（五島ごとう）、門ままかど（紀州）などの名があり、またたいていは中元ちゅうげんの行事であつたゆえ、全国を通じて盆かまど・ボンクド・盆飯・盆粥という例が多いのである。食べ物や野天でこしらえるということは、大人でも興味を持つほどの珍しい事件なのに、ましてやこれに携わった者がいつの世からともなく女めの童わらわであつた。どうしてこういうことをするのかは彼らにはわからぬ。ただその面白さを忘れることができなくて、折さえあればその形をくりかえして、おいおいと一つの遊びを発達せしめたのである。

精霊飯

ままごとは親が見ても静かでしおらしくまた他日の修練にもなって、同情のもてる遊びであつたが、それが最初から遊戯として生まれたものでないことは、盆のままごの一つの例を見てもわかる。浜名湖周囲はまなこの村々ではシヨウロメシ、瀬戸内海のある島では餓鬼飯がきめしとさえいう通り、盆は目に見えぬ外ほかじょうりよう精霊や無縁ぼとけが、数限りもなくうろつく時である故に、これに供養くようをして悦よろこばせて返す必要があつたとともに、家々の常の火・常の竈かまどを用いて、その食物をこしらえたくなかつた。それが門・辻かどつじ・川原等かわらに、別に臨時の台だ所いどころを特設した理由であり、子どもはまた触穢しよくえの忌いみに対して成人ほどに敏感でないと考えられて、特に接待掛りの任に当つたものと思われる。

お盆飯の材料は家々から持寄もちより、米などは貰もらい集め、野菜ものは畠はたけから取つて来てもよい。或いは大角豆ささげだけは勝手に畠はたけに入いることを許していたという土地があるのも、私には意味のあることに思われる。盆に来る精霊は、大角豆畠ささげはたにしばらく隠れて居るというよう

な言い伝えもあるからである。地方によつては盆ぼん棚だなの供物くもつ、ことに水のこまたは水の実みと称して、茄子なすをこまごまと刻んで水と米とにまじえたものを、家々から貰つて来て味をつけて煮ることもある。箸はしにはかならず精霊様の麻おがら稈からを折つて用い、めいめいが喰たべる前にまず辻々で無縁ぼとけを祭り、または少しずつ近所の家に配つてまわるといふ例も多い。私はまだそういう場所に行き合わせたことがないが、小さな女の子が年上の娘の子の指図さしずを受けて、まじめに一生懸命に働いていた様子はほほえましいものであつたろうと思う。一度は自分もそういうことをして来て、年を取つた村の女たちが、悦んで傍から世話を焼き、またはこの食物をもらつて食べておくと夏なつ瘦やせせぬまじないなどといつていたのも、すべて皆いつからともない仕来りしきただからで、たとい小さな女の子のすることでも公務であり、どんなに楽しくてもそれはやはり労働であつた。

これが普通の日のただの遊戯となつてしまふ前から、ままごとという言葉はおそらくは有つたのであろう。コトというのは古い日本語で、祭その他の改つた行事を意味していたらしい。徳島県の伊島いしまなどでは、盆のままごとというのがこの精しやうり霊ようめし飯の儀式のことであつた。盆以外にも同じ行事が元もとは多かつたであらうが、もうその目的が盆ほどには明らかでなく、従つて人が注意をせぬうちに、追ひ追ひと変化したかと思う。

盆と成女式

盆のままごとと正月のドンドン小屋と、今一つの似た点は成長段階、すなわち子どもが大人になる境目^{さかいめ}を、かなりはつきりと区切っていることであつた。遊びのままごととは七つ八つ、もう少し大きな児^こは冷淡になるに反して、この日は年かきの親玉ともいふべき者が采配^{さいはい}を揮^{ふる}つて臨時に女の子ども組が組織せられる。讃岐^{さぬき}の小豆島^{しょうどしま}の餓鬼飯^{がきめし}などは、十六、七歳の女子のみが参与するらしく、伊予の宇和^{うわ}地方の御夏飯^{おなつめし}にも、年頃^{としごろ}の娘ばかりの集会があるということだが、その他の多くの土地では頭に立つ女は、もう一人前に近くなつていても、これに付き随^つう面々^{したがつ}は村の少女の全部で、それが組織ある行動に出^いづることは、左義長^{さぎちやう}の子ども組も同じであつた。

そういう中でも特色のあるのは対馬^{つしま}の阿連村^{あれ}などに行なわれているという盆の十四日のボンドコであつて、トコというのがやはり釜壇^{かまだん}のことであつた。島誌^{とうし}のしるすところによれば、ここの少女団の首領は十七歳で、その指導の下に村に二カ所の大きな竈^{かまど}を粘土と

小石をもつて作り上げ、その上に台を置いて男女二つの粘土製の人形を載せる。翌十五日には、ここで飯を炊き、村の若者連の踊と芝居をする組に送る例になっている。信州浅間の山麓の村では、この盆竈の行事をカマツコというそうだが、これにも物前すなわち成女期に近づいた女たちが率先して、米と少しの銭を持寄り、食物を調べて村の青年たちを饗応するのが定めであつた。これがいかなることを意味するかは、多分彼らにもわからなかつたろうが、少なくとも今まで全く経験せぬ心ときめきを感じただけが推察せられる。

男の児が盆飯を炊くという例も東北などにはある。或いは男と女と二組に立ち分れ、一方の築いている竈を壊して行くという悪戯も稀にはあつたということを聴いている。女十七歳というのは少し大きくなり過ぎているが、これも正月のオンベ仲間の中老と同じく、もとは単なる顧問格だったかも知れぬ。伊豆の田方郡の盆の竈などは、これを作り上げる者は十四歳の娘ときまつていた。珍しい話だがその時は必ず腰巻を取つて出て来た。というのは多分この日から、新たに裳をはく者ということであつたかと思う。ここでは男の児の竈はなく、ただその少女組の竈を突き崩しに来るのを、十三歳以下の娘が協力して一生懸命に防衛するのが重要な役目であつたという。

こどもの新語

子どもは自分たちの遊戯を改良し、また発達させる能力を具そなえているということが、ままごとと鬼ごとの二つの遊びにおいてはことによく見られる。盆かどの門ままの行事はすでに成人が重きを置かぬようになった土地でも、彼らは一いっちょよう朝にしてその模倣もほうを中止しなかつたのみか、むしろその中の最も面白かつた部分を残して、他を新たな環境に適するようにかえていつて、昔の生活様式を我々のために保存しているのである。御礼を言わなければなるまい。

皆さんの郷土でままごとを何と呼んでいるか。これと今日流行の姉あねさまごととはどういう関係にあるか。とにかく子どもを理解するために、またわが身の昔を省みるために、もう少し互いに他所よそのものを比べ合う必要があるかと思う。私などにも今はまだわからぬ言葉が多いが、気長に集めているうちには、案外なことが見つかるという経験だけはもっている。たとえば備前の邑おく久郡などで、ままごとをバエバエゴクというのは、釜かまの下に焚たく火

を形容した小児語がもとらしい。

夕方子どもが食事を待つ間、明るく燃えるものに注意を向けていたことは、火と燃料とに関する多くの名称が、彼らの製作にかかるのを見ても察せられる。九州でバエラ、中部地方でバイタ、モヤとかボヤとかいうのもそれであり、近畿一帯で松毬まつかさをチチリ・チンチロなどというのもそれかと思う。だからバエバエゴクも御飯をたくわぎということに解せられるのである。下総しもうさの海上郡うなかみではオミツチャゴというのがこの遊びの名である。

今ではあの辺でもあまり耳にしないが、もとは台所を御水屋おみずやといていたので、それで煮炊たきの真似を御水屋事おみずやしことといい始めたのであろう。安房半島あわに行くときケンゴトまたはケエヤドツコ、ケというのは常つねの日の食事ごしらえで、その仕事をケシンといている土地も他にはあるが、ケエヤドという語はちよつと解しかねる。これはカイヤドすなわち台所のことで、古語にもカイヤがあり、八丈島ではカイコヤとも呼んでいる。それが幼い者に採用せられたために、偶然に今も残っているのである。

しかしままごとの起りは前にもいうように、毎日の食べ物ごしらえの真似ではなかった。何か改った日の食事の物々しさと、これに伴う興奮に印象づけられて、自分も役者として働いていたのが始めであった。それを忘れてしまうと新たにまた似合わしい名を付けて、

少しずつ遊びの興味を補足して来たものと思われる。

くばりごと

ままごとはしだいに御客遊びの方へ展開していったようだが、それに入らぬ前に調理した食物を、隣近所の人たちに持つて行くという段階があつて、それが今でもなかなか人望がある。東京などの小さな女の児こは、カランコロンと口で木履ぼつくりの音をさせつつ、何べんでも御馳走ごちそうをじじばばの処ところへ持つて来てくれる。富士山南の村々でままごとをコンバ、或いはオコンバというのは訪問辞ほうもんことばであろう。これだと盆の十五日の辻飯分配つじめしの方式が、まだ片端かたはしは保存せられているのである。徳島県の北部でこの遊びをクバリアイ、飛驒ひだのたかやま高山でクバリゴト、配るといふのは正式食物の贈与で一段と元もとの心持こころもちに近い。

甲州きたこまの北巨摩郡ではオワザツコといふのが、姉様あねさまごとの方言だと郡誌ぐんしにはあるが、東国ではワザツトはもと物を配るときの辞令の語であつた。どうしてわざとというかは考えて見る人もないが、近ごろの感覚では「しるしばかり」というのに同じく、われわれが最小限度、守らずにはおられぬ御義理つかだったので、単なる気まぐれのお遣い物を真似ている

のではなかった。

遊戯にはままごと・鬼ごとに限らず、下にコトという語を添えるものが多い。今ではゴツコ・ゴク・ゴとなり、またはナコ・ナンドなどにも変化しているが、コトの本来の意味はワザ・オコナイ・フルマイも同様に、儀式もしくは祭典ということだったと思うがどうだろうか。子どもの生活を離れて一ぺん考えて見たいものである。青森県のままごと方言は色々あるが、だいたい南部領なんぶはオフルメヤコ、津軽領つがるはオヒルマイコまたはジサイコナコというのがひろい。ジサイコは津軽から秋田へかけて、中央という法事・仏事のこと、文字には持斎と書くべき語と言われている。すなわち、あの地方のままごとは、外形が法事と似ていたのである。加賀の金沢などではこの遊びをオジャコトといっている。御座は年忌ねんぎでなくとも僧を請じしょう、説教を聴聞ちやうもんする人寄せであるが、やはり法事のように食物が出たものと思われる。フルマイは今では物を食わせることのごとく解せられるが、やはり定さだめた吉凶行事のある日のことで、ただこれには必ず御馳走が伴っただけである。ままごとの地方名としては米沢よねざわでもオフルマエゴト、伊豆いずの半島でもフルミヤツコ、遠く飛び離れて肥前の小値賀島おじかしままで、ホンミヤナンドという語が行なわれている。そうして多分もうその理由が忘れられているだろう。

おきやく遊び

上州の桐生きりゆう附近ではオキヤクサンヤツコ、信州諏訪すわ地方でオキヤクボツコ、またはオキヤナンコというのが東京などの御客遊びに該当する。九州でも熊本県の球磨くま郡をはじめ、ままごとをキヤクナンドというところが多いようである。遊戯中心の移るにつれて、新しい名も次々に生まれている。大垣おおがきの附近にはゴチソウサンゴト、信州でも上田うえだ地方にはヨバレツコもしくはオンバレコ、これは新旧二つの方言のたがいに接近して紛れやすくなつた例である。一茶いつさの『方言雑集』にオバチコとあるのが、多分北信の例であろう。子ども遊びに柿かきなど切り刻みて、呼んだり呼ばれたりすることなり也とあるが、これは呼ばれごとでなく、姥うばごとの方から出ているかと思う。

御客遊びをオクサンゴツケンと呼んでいる例が、大分おおいた市にはあるというが、越後えちごのどこかにもオカサマゴツチョという名ができていて、この方はかなり起りが古い。たとえば『甲斐かいの落葉おちば』にはオカダツコ、食物調理の真似をして遊ぶこと、すなわちままごととあ

るが、^{みなみやまと}南大和の方言集にも、^{ひなあそ}雛遊びをここではオカタサンゴトというところある。宮城県はほとんど全国を通じて、オカカブツ・オカカボチといった記録がある。主婦をオカタというのは中世以後の標準語であつて、それを小児があとでなく発音したのが、今日の力アサマ・力カサン・力カ・オツカーなどの語を作っている。彼らの功労は国語の先生よりも大きいかと思う。

ままごとの主役はおかつぱの主婦だったのである。だから主婦の名が変ればそれについてままごとの名も変つて行くのである。母をオウカチャマという越後の新^{しばた}発田辺ではオガチャマゴト、主婦がジャジャと呼ばれる秋田県の北部ではジャジャボツコというのがままごとのことである。ジャジャは中世の茶々の局^{つぼね}などのチャチャと同じく、もとは緑^{みどりご}児が母を呼ぶ声から出たものらしい。今では父をチャンと呼ぶ方が多くなっているが、越前の福井附近でままごことをジャジャンコ、紀州の熊野でチャチャボコというのも、かつては母をそう呼んでいた名残りかと思う。そういう例ならば外にも求められる。山形県のオバコは今日は未婚の女のことだが、米^{よねざわ}沢地方ではままごことをオバコダチ、中国地方のオバサンは他家の婦人のことなのに、但^{たじま}馬ではこの遊びをオバサンゴトと呼んでる。それはみな家々の主婦をウバといったころの遺物なのである。

ゴコトンボ

主婦をオカタという語が、上流に限られている時代には、常人の家ではそれをウバといったのである。その語もまだ残って東北ではアツパ、沖縄ではアンマがあるが、一般に呼^よびな名は許される限り上級へと登って行つて、裏^{うら}長屋にも奥さんは多くなつたのである。これから考えて行くと信州松本附近のように、御客遊びをオバゴトといっているのは一時代古い頃の形といふことができる。静岡県でも西の方によるとオンバゴトがある。村によつて発音は少しずつ変りオンバイゴトなどという児^こもあるから、もう主婦の真似といふことは忘れているかも知れぬ。

九州の端々^{はしばし}でも上五島^{かみごとう}でバツジヨ、薩摩^{さつま}の下甕島^{しもこしきしま}ではバツコーといふのが、ともにままごとを意味している。それよりもさらにわかりにくいのは紀州^{ひがしくまの}東熊野^{おわせ}の尾鷲^{おわせ}あたりで、ナンコビまたはゴコトンボというのが同じ遊びの名である。ナンコビの方はまだ不明だが、他の一方は私には説明できる。ゴコというのは中国で、若い女性を意味するよ

い言葉であるが、そのゴコと姥うばとの応対を真似たことが、ゴコトンボの名の起りであった。それによく似た例は伊豆七島の三宅みやけ島の一部で、ままごとをネザンバまたはネタンバアということ、これは「ねえさん婆さん」の意味だということ、島の人もまだ知っている。村によつてはオンバツコもしくはウンバージというところもあり、そのウンバージも姥爺うばいだろうという。主人夫婦のことをオジンバ（土佐幡多とさはた、近江伊香いか）、オンジヨウンボ（鹿児島）、バオジ（出雲いずも）、ウバグジ（陸前栗原）などといい、または熊手くまでと高砂たかさごの絵から思い寄つて、ジョウトンボという土地もあるのだから、ゴコトンボも決して不思議な名ではない。

ただし女の児の遊戯に出て来るゴコは、ただの年若い娘ではなく、花嫁御はなよめごのことであつたかと思う。常の日には見られぬような化粧をして、里で散々さんざん練習をして来たよい口こ上うじょうで、新たな家の姥と対談している姿を、眼をまん円まるくして傍聴まうしていた小娘たちが、それを自分たちの遊戯の名とし、または中心としようとした気持は、神事しんじのわざおぎが近世のただの芝居になつて来た経過と、何だか似つたものがあるような気がする。食物の調理を中心とした古い遊戯がしだいに眼で視み、耳で聴きく楽しみに移つて来たのは、必ずしも明治以来の新文化の影響だけではなかったと私は思っている。

鬼事言葉

人形がおままごとに参加したのは、遠い対馬つしまの阿連村あれの例はあるが、一般にはずっと新しいことで、今ある姉様遊びあねさまあそびに伴うてひろまったものらしい。姉様遊びの姉さまが新嫁めの別名であつたことは、あの顔より大きな髪飾りかみかざり、紅の衣裳いしやうの染模様そめもようを見てもわかるが、その花オカタが古いオカタと同居して、特に姉様と呼ばれて区別せられる必要などは、元もとは少なくとも村落にはなかつたのである。

この姉様人形が入つて来たところから、ままごとはしだいに食べる遊びでなくなつた。三宅島やけしまのネザンバなどはどうかしらぬが、子どもは人形を相手にして遊び出すと、急におしゃべりになるか、そうでないまでも言葉の楽しみを味わう力ができてくる。大人が傍かたわらにいるうちは黙っているが、それでも独言ひとりごとや心の中の言葉が数を増して、感情のようや濃やかこまになつて行くのがよくわかる。やたらに切り刻んだものを食べさせまいとする、衛生おかあ様の心遣こころづかいはなくとも、文化が進めばままごとは文芸化せざるをえなかつ

たのである。私は実は人形の普及がこれを促した大きな力ではなかったかと思っているのだが、その説明をしだすとまた長たらくなるから、今回は見合せておく。とにかくに日本の子ども遊びは、全体に込み入ったものが多くなり、かつ文句が面白くまた繁しげくなつて、言葉の楽しみというものが親たちの近ごろの会話よりも大きかったのである。

そういう中でも特によく発達しているのは鬼おにごとであろう。これも名称が自ら語ることく、最初は神社仏閣の鬼追おにい行事に、少年を参加せしめたのが起りと思われるが、今日は野球の規則の一部を採用したアブト鬼というのまでが各地にはやっている。内田武志君の『静岡県方言誌』の一冊が、丹念にこの種類を集めている。全国各地の児童界にも、親がこしらえて与えたとは思われぬ色々の鬼事術語が、土地ごとに制定せられている。

たとえば何かの理由で一人だけがタイムを要求する合図あいずの語に、ミッキ・ミツコ・ニツキ・モンキ・マツチ・チョマ・ゴイロ・ゴイ・ゴー・タンマ・タンコ・テンマ・タエマ・オヒマ・マヒ・ドツパ・ベン等、さては幼少な者を加えて特別扱いにすることをチャチベ・アブラボウズ・カワラケ・ナベコ・ヒデコ・ミズツコ・スポノコ・ロツパ等々、一々土地を挙げその由来を考えようとしたら、読者が困ってしまわれるだろうほど数多くできているのである。

狐あそび

信州小^{ちいさがた} 県郡の民謡集に、鬼遊びの童^{わらべ}詞^{ことば}が七章まで載っている。

鬼の来るまで 洗濯でもしやしよ

鬼の来るまで 豆でも炒^いりやしよ

がらくがらく 石^{いし}臼^{うす}がらく

豆はたきとんく

鬼を激^{げつ}昂^{こう}させる手段として、東京でも洗濯だけというが、こうなると、もう一つの演

劇であつて、しかも作者は土地の子どものほかにありえない。あるいは文句を他所^{よそ}から聞

き覚えて、呪^{じゆもん}文^{もん}のようにそれを守り、または若干の作意を加えたものが鬼きめの言葉に

は多い。羽後^{うご}の大館^{おおだて}附近に行なわれていたのは、

隠れぼっちにかたなの者は

しんざのこちやのれんげの花

これを新沢という村の麴屋こうじやのことにように思っていたそうだが、実は非常に古くからある小ちいさこぼ子法師、すなわち一寸法師の物語であつた。江戸でも早くから意味が分らなくなつて、チーチャコモチャ桂かつらの葉などとうたつていた。備前の岡山では、

つーちやこもちやかずらの葉

ねんねがもつたらちよと引け

すなわち東北は遠いだけに、まちがいが幾分か大きかつたのである。

鬼きめというのは、小にぎこぶしさな握り拳を並べさせて、歌の文句に合せてその上を突いて行くのだが、その言葉にも遊戯の趣意を説こうとする、序曲のような役目があつたのかも知れぬ。ことに隠れ鬼や目くら鬼では、遊びのなかばでは声を立てることができない故に、初

めに歌つておく文句が多かった。

だあまれく雉の子

鉄砲かたげがとおッぞ

うんともいうな屁もひんな

これは肥後の球磨地方の、モウゾウ隠れ（隠れんぼ）の歌であつた。是よりも一段と劇的なのは今も田舎に残っている狐遊び、大阪でも「大和の源九郎はん」などといった鬼ごとである。百年以前の『嬉遊笑覧』にも、

鬼ごとの一種に、鬼になりたるを山のおこんと名づけて、引きつれて下に屈み、ともゝつばな抜くと言ひつつ、茅花抜くまねびをしてはてに鬼に向ひ、人さし指と大指とにて輪をつくり、その内より覗き見て、是なにと問へばほうしの玉といふと、皆逃げ去るを鬼追ひかけて捕ふる也

と見えている。今日の「御山の御山のおこんさん」遊びの筋書は、もうまただいぶ長くなつていて、これに子どもでなくては言えぬようなおかしい問答が数多く繰り返される。

子買お問答

私などが子取ろといっていた遊びは讃岐^{さぬき}ではオトリコトリ、南伊予でウシノコトリというのも同じで、鬼事の一種であった。強い大きな児^こを前に、順々に帯に手をかけて繋^{つな}がり、鬼がその後の児を捕^とろうとするのを、動きまわって先登^{せんとう}が防ぐので、これは動作があまり激しいので、短い単調な言葉しかくり返されていなかった。ところが別に今一つ、

子買お子買お

子を買うてなんにする

赤のまんまに魚そえて食わそ

というような問答を、際限もなく遣^やり取りする遊びがあつて、それを大阪では子取りといつたときが、本当であらうか。

子買おの文句は国々で実によく発達している。奥州おうしゅうの端では子売ろというそうだから、元もとは「どの児がほしい」というのが一般であったと思われるのだが、近頃は遊びの名前までが變つてきている。たとえば熊本の附近では猫ねこもらい、越後えちごの岩船郡いわふねでも猫じゃ猫じやというのがこの遊びで、

猫じや猫じや

どの猫ほしや

後の何々猫ほしいわ

という類たぐいの問答をする。仙台の市中の子どもはこれを雀すずめとりといった。

どの雀よから

いつも来るよな誰それ雀よから

どの茶碗ちやわんでかせるくわ（食せる）

金の茶碗でかせる

という風^{ふう}に、着物や家などを次々にたずね、それが一通り終ると、名ざされた子どもが、自分でブーンといつて飛んで来る。すなわち子どもは問答の面白さに氣を取られて鬼事はもう忘れていたのである。しかし埼玉県で雛^{ひな}買^かいというのはこれに反して、婆^{ばあ}さんが川^{かわ}越^えの市^{いち}へ雛人形^{ひなごころけい}を買いに行き、一つ一つを見立てて、くすぐって笑わぬのを買おうといったり、白^{うす}を挽^ひかせたり、よくないといつて返しにきたり、芝居同様の色々のしぐさがあるのだが、それでいて留守^{るす}にその雛^{ひな}が逃げ出し、それから鬼^{おに}ごことになるのだといっている。察するに最初は、「向いのおばさんお茶のみにお出^いで、鬼^{おに}が怖^{こわ}くて行かれません」のように、または遠州の鰻^{いわしや}屋問答で、鰻の値段をきいて「負からんと後の子^{うしろ}を取るぞ」というように、鬼の遊びを面白くする前幕であったのが、末には児童がその文芸を愛するあまりに、これを独立した静かな遊戯の一つに、作り上げたのかと思われる。

国語と子ども

年をとった者に子どもの話をさせると、どうしても懐旧味ばかりが多くなる。もう全体を説き尽くせないことがわかったから、手短かに私の要点と思うことを述べよう。

いわゆる児童文化は孤立した別個の文化ではない。国にそのような離れ離れのものが、並び存するわけがないとすると、単に一国一時代の文化相が児童を通して視れ^みばまたちがった印象を与えるというまでの意味しかない。そういう心持^{こころもち}をもって皆さんと自分は、この児童文化を少しばかり見なおした。児童は私が無く、また多感である故に、その能力の許す限りにおいて時代時代の文化を受け入れる。古く与えられたものでも印象の深さによつて、これを千年・五百年の後に持ち伝えるとともに、いつでも新鮮なる感化には従順であつた。そうして常に幾分か親たちよりも遅く、無用になつたものを棄てることにしていたらしい。ことに国語のうるわしい匂い^{にお}・艶^{つや}・うるおいなどは、かつて我々の親たちの感じたものを、今もまだ彼らだけは感じているように思う。こういうところに歴史を学ば

うとする者の反省の種が潜んでいる。

どうしてこのように無心な者の言葉が、聴けば身に沁むのかということを考えて見るのもよい。風のない晩秋の黄昏に町をあるいて、

大わた来い／＼まゝ食わしよ

まアまがいやなら餅食わしよ

という歌を聴いて、涙がこぼれたことも私にはあつた。或いは白髪の翁が囲炉裏の脇で、膝の子の小さい手をおさえながら、

ひいひいたもれ

火が無い無いと

この山越して

この田へおりて

などと歌つてきかせているのも、単なる昔なつかしの情を超えて、我々を教訓しまた考えさせる。火もらいは燧ひうちいし石の普及よりも、もう一つ以前の世相であつた。それが奥おうしゅ州うの昔話や信濃しなのの山村の子守歌だけには残つている。老人の記憶にはまた一つもとの子どもがある。言葉が面白いために消えてしまうことができなかったのである。霞ヶ浦かすみうみの湖岸の村にも、

ひいころ火ころ

火は無い無いぞ

おばたの下で云々うんぬん

というような歌がある。東京では年少の者を罵ののるのに、ヒイヒイタモレという語があつた。すなわち元もとはこの土地にも同じ歌が、幼い人々に口ずさまれていたのである。

鹿遊び

鹿・鹿・角・何本の遊びが、近江^{おうみ}と筑後の二カ所にあったということを、物珍しそうに書いておいたところが、たちまち全国から百七十何通の手紙が来て、自分の土地にもあると告げられたのにはびっくりした。この御札の方法は別に考えなければならぬが、とにかく大要をここに載せて、読者におことわりをする義理が私にはある。

この遊戯が近ごろまで行なわれていたのはだいたいに九州と四国、ことに福岡と愛媛の二県は、各郡市残らずというほどに分布しているが、東の方も千葉県の東海岸、越後^{えちご}佐渡^{さど}にまで及んでいた。報告のなかったのは奥羽^{おうう}六県と富山以西の日本海側の諸県および長野・岐阜の中部二県だけで、近畿・東海にもぽつぽつとあるが、やはり瀬戸内海のまわりが多い。百七十何通といっても、同じ土地から幾人もの知らせがあったのだから、総数にして二十四の市と五十五の郡と、五つの島との計八十四カ所に、現在もなお行なわれ、またつい近年まで確かに行なわれていたのである。報告者はいろいろの年齢の人で、いずれも

十年・二十年の前に自分が携わっていた記憶を喚び起してなつかしいと言っておられる。若いおかあ様たちを読者に予期していたのだが、こういう意外な人までが見ておられたのである。なるほど新聞はよいものだなど、改めてまた経験したことであつた。

そんな話よりも、遊戯のどう変つて来たかということ、あらましかでも述べておかねばならぬ。このごろの鹿遊びは、いったいに男の児この荒々しい運動となり、女が参加することはできぬようになってゐる。一人がうつむいて馬になることは外国のも同じだが、遠くから走つてきて木馬もくばのように飛び乗り、足が地についたり、乗りそこねたりするのを負けとしている所さえある。それでいて例の鹿々何本を、まだ掛かけ声こゑのように唱となえているのだから、考えてみると子どもは面白い。伊予などでは胴乗りと称して、幾人もの子どもが帯をつかまえて繋つながり、長い馬になつて組を分けて乗りつくらしをしているものもあるが、やはりまだ鹿何ちようなどと、数を当てさせる言葉を使っている。そうして他の多くの例では、依然として当てられた児が次の馬になる遊びなのである。

遊戯の進化

九州・四国が最も新しい流行地である故に、変化も一段と烈しいのではないかと思う。第一に角^{つの}という語を落しているのが多い。初めてシカシカが鹿だったということを知らなかった、と言ってきた人も多^{おおぜい}勢^{せい}ある。或いはチカチカなんぼ・チケチケ何本・カチカチなんぼという処^{ところ}もある。京都はこの鹿々が犬にでもなったものか、

ペスペスこれなんぼ

などといっている。この唱^{とな}え言葉はもつと奇妙に変っているのだが、それはもう一度^{あと}後^ごでいう。四国から東では、だいたい鹿の角という者が多いから、何本という問いの意味はまだ忘れてしまつてはおらぬらしいのである。

最初これがあてももの遊びの一つであることを知っていた間は、女の児^この中でも行なわれ

ていたものと思われる。九州北部でも稀^{まれ}にはシカシカ何本と唱えて背なかを叩^{たた}き、指の数
をいい当てさせることをしていたと、あるわかい女の人は報告している。それを男の遊び
を半分だけ真似たように思っているのは多分誤りで、まだ他の地方ではお年玉の数、銀^{いちょ}
杏^うや榎^{かや}の実^みの数を隠して、相手に当てさせるにも同じ言葉を唱え、または手を組み、輪
になつて、中央に一人の児をしやがませ、目を押えて物の数を当てさせる場合にもなお口
々にこの鹿々何本を唱えていたというから、馬乗りの方がむしろ一つの応用だったとも見
られるのである。

土地によつては、何の申し合せもなしに、不意にかがんでいる児の後から乗リかかつて、
指を高く掲げて鹿なんぼと問うという例もある。これは面白かつた遊びのおさらえとも考
えられぬことはないが、浜松地方などでは家の中でこの遊戲をすることがあり、それは唯^{ただ}
うつむいている背なかの上で、鹿の角に何本あるかを問うだけで、女の子もこれに参加す
るというから、少なくとも以前はもう少し静かな、同じ馬乗りとはいつても、ただこちら
を見てはいないということを確かめる目的で、相手を屈^{かが}ませてただけかも知れない。

二つの遊戲の結合する場合は多い。たとえば石蹴^{いしけ}りなどは私などの全く知らなかつた遊
びだが、東京でいうチンチンモガモガ、関西でいう足ケンケン^{じようず}の上手な児なら、誰でも

これに参加せずにはいない。ケンケンも元は蹴ることを意味していたのかも知れぬが、近ごろはただ片足で飛んで「ケンケンばたくなぜ泣くね」の歌を、うたいあるく遊びだつたのである。

児童文芸

それからまた、この鹿遊びの外国から入って来たということを、全然無視していたのも悪かった。必ずそうだとは誰にもいえないが、そういうこともあり得るとまでは認めなければならぬ。越後^{えちご}高田^{たかた}のある女学校で、明治初年に教育を受けた一女性がこの遊びを記憶していた。ここに来ていた米国人の教師で、格別に子どもの好きな人があって、たくさんあちらの遊戯を教えて行つた。これもその一つであつたようにこの婦人はいつている。これは確かな事実であるにしても、今ある九州・四国の鹿々なんぼが、ここから運ばれていつて発達したということまではとうてい証明する道はないであろう。しかしこの程度の出来事なら、同時に他の土地にもあつたかも知れない。私の受取つた報告の中には五十年前にあつたというものが三つ、あるいは七十近いお婆さんが、私の生まれる前からあつたといった例も同じ越後にあつたが、それにしたところで明治以前でない。児童の遊びは他の慣習とちがつて、一年のうちには百度もくり返され、真似の上手な手あいが熱心に見つ

めていたのである。一旦^{ある}流布するとすれば足取りは早かったはずである。

注意すべきことには、鹿々角何本というように安らかな日常語で問う例は割に少なく、前に掲げた浜松市をはじめ、神奈川・山梨・富山などの諸県には、

鹿よ鹿^{なんじ}よ汝の角は幾本なりや

という類の、近ごろの新文章口調^{くちよう}で問うているものが多い。それが滋賀県にも、香川県にも、またシカシカなんぼの最も盛んな福岡県にもあるのは、あるいはまたこの言葉の珍しく、かつ大人^{おとな}くさいのに興味をひかれたのが、はじめだったかもしれない。指の数を当てさせて、はずれたとき、ちがうという代りに正しい数をいい、「三本何本」と畳^{たた}みかけて問う風^{ふう}は九州にもあるが、大分県の方には最初から、

レイボン、何本

という妙な問いかたがあつて、それを零本のことだと解しているらしい。滋賀県の犬上^{いぬかみ}

郡でも、

レイボン、鹿の角何本

鹿の足何本

などという聞きかたがあるという話だが、このレイボンなどが、或いはなんらかの手掛り（てがかり）ではあるまいか。私はなお他の地方の変った事実には、これからも気をつけていたいと思っている。

ネンガラの鉤

念木・念棒の問題についても、二十何通の通信を私は受取っている。遊びの方式はどこ
の土地もほぼ一様で、ただ細かな規則に少しずつの差異がある。名称は隣どうしの村々で
もちがっていて、しかも不思議に遠い地方との一致が認められる。あまり数が多いので私
も全部は列記しなかったが、やはり一ばん多いのはネンで、その中でもネンガラ・ネンガ
リなどがひろく行なわれている。木とか棒とかクイとかいうものの、今一つ古い言葉がカ
ラではなかったかと私は思う。

ネンガラには元もとはみな鉤かぎ枝えだがついていたろうというのが、私の新しい意見であって、
これにはまだ同意の人が少ないように思われた。しかし自分が鉤のある念棒を用いていた
というためでなく、本来は二ふた叉またに岐わかれた木の枝というものが、特別に霊の力があるもの
のように、我々の祖先には考えられていた。その心こころ持もちが今も子どもの中に伝わってい
るごとく感じたからである。二ふたまた大だい根こんなどは近頃の話だが、もとは「またぶり」とい

う股またになつた杖つえを、旅ひじりの聖などは皆ついていた。西洋で占うらないの杖というのも皆これで、金鉞・地下水の発見の技術も、また北アジア名物の宝たから捜さがしも、もとはすべてこの枝によつたのであつた。ネンガラネンガラの童戯が果して私の想像のように、最初子どもらしい大人おとなの占いの方法に出たものならば、必ず鉤があるわけだと私は思っているのである。

ところが関西のネンガラにはもう一般に鉤がない。ないのが当り前のようという人が多いので、少しばかり弱つていると、これも幸いに実例が出てきたのである。九州でも中央の山地にはまだ鉤のあるネンがあるらしい。豊後ぶんごの玖珠くす地方のものは久留島武彦くるとしまたけひこ氏が図示してくれられた。ただしここのは関東とちがつて、小枝の方を長くして把手とつてにしている。それでは力の入れかたが我々とは異なつていたろうと思うが、とにかく呼吸だから、覚え込んだものが伝わっているのである。或いは鉄で打たせたものもあつて、これも棒ではなく、よほど曲つているのが面白いと思つた。山口県の一部では、キリコまたはネコというのが、鉤のある念木の特別品であつた。佐賀県および豊前ぶぜんの一つの報告では、ネン木は通例は直ぐな棒だが、時には枝付きのものを大事にして持つておる子がある。この方が勝負に強く、相手に打たれてもくるつとまわつて容易に倒れぬからということであつた。

鹿遊びの分布

朝日新聞の「こども風土記」の中に鹿・鹿・角・何本の遊戯のことを書いておいたら僅^{わず}か七、八日の間に、驚くべし百七十余通の手紙葉書^{はがき}が到着し、それがいずれも近年までこの遊びをしていたという、関係者自身からの知らせであつた。この方面においては民間伝承の会はまだ無識^{むしき}であり、かつ怠慢^{たいまん}であつたことが明らかになつたから、罪^{つみ}滅^{ほろぼ}しのためにその資料を整理して、同志諸君に報じ、またこの問題を起してくれたアメリカの学者に通信し、同時に各地の書状の主^{ぬし}に感謝の意を表したいと思う。一々その氏名を掲げるのが本意だが、あまり数多いのでそれができない。ただ次の二十四市・五十五郡と五つの島合せて八十四カ所以上の土地に、ほんのわずかずつの変化をもつてこの鹿遊びが行なわれていたということを、お互いに知ってもらい、かつそれを比較し綜合してみると、こういうことが考えられるというまでの報告をもつて、私の答礼に代^かえたいのである。

まず最初に現に鹿々の遊戯が行なわれ、または近い頃まで行なわれていたことの、確か

なところは次の通りである。地名の下の数字は受取った書状の数で、二、三人以外はみな成人だから、^{これ}是だけの諸君が独立に記憶しており、また思い出してくれられたのである。

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	福岡県久留米市
嘉穂郡	直方市	鞍手郡	糟屋郡	福岡市	朝倉郡	浮羽郡	大牟田市	三池郡	八女郡	三井郡		
6		5	2	4	3		4					5

同
八やっしろ代郡

大分県しもげ下毛郡

同
中津市^{なかつ}
2

同
宇佐郡

同 東国東郡 ひがしくにさき

同
別府市

同
大分郡

同 大分市 5

愛媛県宇和島市 2

同
西宇和郡にしゅうわ

同
八幡浜市
2

同
喜多郡
2

同
上かみうけな浮穴郡

同
伊予郡
2

同
松山市
16

岡山県あさくち浅口郡

兵庫県あこう赤穂郡

同かさい加西郡

大阪府きたかわち北河内郡

和歌山県ひだか日高郡

京都府京都市

三重県あやま阿山郡

滋賀県しが滋賀郡

同おおつ大津市

同いぬかみ犬上郡

同ひこね彦根市

同たかしま高島郡

愛知県へきかい碧海郡

静岡県はままつ浜松市

同ぬまづ沼津市

同	田方郡	たがた きたこま
山梨県北巨摩郡		
神奈川県足柄下郡		あしがらしも
同	中郡	なか
同	高座郡	こうざ
千葉県夷隅郡		いすみ
群馬県吾妻郡		あがつま
新潟県高田市		たかだ
同	南蒲原郡	みなみかんばら
同	中蒲原郡	なかかんばら
同	佐渡相川	さどあいかわ
富山県下新川郡		しもにいかわ

この表で明らかのように、だいたいにこの遊びの分布は西の方、ことに九州と四国との北半分に片よっており、福岡、愛媛の二県などは、ほとんど全般といつてよいくらいだが、

それと繋がらない他の府県にも飛び飛びに弘く行渡っているうえに、方法と言葉の異同が入組んでいるのは、何か一つの古い起りがあって、近年の流行ではないように思わせる。しかしその伝播の実状なり、また子どもの新しい遊戯を迎える態度なり、習癖なりは、今日まだ決して明らかになっているわけでもない。むしろこういう顕著なる実例に基づいて、改めて是から研究せられてよい問題である故に、汎く児童文化の考察者のために、我々はこの記録を残して置きたいのである。

遊びの方法はだいたい馬乗式で、背なかを敲くというのは至って少ない。荒い挙動である故か男の児が主であつて、女もしていたという例は二つだけである。単純な組合せは三人で一人が行司、数を当てられた児が次の馬になることは普通で、ただ問答の文句と節とが、土地ごとに少しずちがつている。指は上に向けて高く掲げる者が多く、片手は馬を押えていて五本以下の数しか問わない。両手で十までの変化を争うという例も稀にはあるが、こうなると馬の不利益ははなはだしい。そうでなくとも多くの児童が代る代る、どしんと乗りかかるのは相応にやりきれなかったと言っている人がある。或いは握り拳をさし上げてモゲタまたはモゲタリという処も九州に二つ三つあるが、是は多分土地だけの改作であろう。もっと大きな変化は伊予の各地において、幾人かの子どもが前の子の帯を

捉とらえて、連鎖式ともいふべき長い馬になり、それへめいめいが走って行つて飛乗とびのるもので、是は胴乗どうのりと呼ぶ村もあつて、馬飛びの運動との結合かとも思われる。鹿々何本の文句は口にしながらも、指の数は当てさせずに、落ちたり足が地に附いたりするのを負けとしているものがある。

九州のどこからしい或る一地では、鹿とは言わずにただ馬乗りになつて、

トントントンこれなんぼ

と問うている例がある。或いはもとその文句に合せて、背なかを叩たたいていたなごりではないかと思う。或いは男生徒のこの遊びをするのが羨うらやましくて、自分たちでも互いに背を打つて鹿々なんぼを唱となえ、指を出して当てさせる戯たわむれをしていたと知らせてくれた女性が三人ある。問いの言葉に格別の興味をもち、節をつけて唱えているのが一般であるのを見ると、これはこの方を主としていたのが、後のちおいおいに相手を馬にして飛び乗る挙動の方へ移つて来たのではないかとも思う。佐賀県の例では始めからの申し合せもなく、不意に後から乗りかかつて指の数を問う戯れもあるという。これなどはいよいよ背なかを叩く

方が元の形ではなかったかを考えさせる。

次には指の数を問う文句であるが、これにはことに面白い変化がある。全体に鹿・鹿・角・何本とくぎつて、はつきりと言う者が少なく、九州などは、

しかく何本

またはシカナンボというのが普通で、それが鹿だということを今始めて気づいたという人も多かった。鹿の角を明らかに言っているのは、九州では博多と京都郡とただ二カ所だけで、その他はシタシタ何本と謂ったり、またはチカチカ何本という者が方々にある。広島市などでは、

チケチケワンボ

とさえ謂っている。紀州の日高郡でもチカチカこれ何本、京都ではまた、

ペス ペス これ何本

つまり鹿の遊びだということとはもう忘れていたのである。

愛媛県の方に来ると、鹿の角何本というのがまだ ところどころ 処々に残っているが、一方には色々の言いかえが始まり、それも九州ほどには統一していない。最も簡単な、しかしかなんぼ以外に、たとえば、

しかいちなんぼ（喜多）

しかんちよなんぼん（松山市等）

しかしかなんちよう（温泉）

しかやんなんぼ（越智）

しかくしかの年なんぼ

その他の珍しい変化が現われている。これ是は運動の間拍子まびょうしとも考え合せて見るべきものであろうが、とにかく意味もわからぬ語が永くなが伝わるには、別にそれぞれの理由が隠れて

存するものと見てよい。注意すべき点はなお幾つかあるが、九州でも大分郡と別府の町とだけに、

レイボン何本

と言ってきく例がある。是は下の児の答えが当らなかつた場合に、それを打消して「三本！ 何本」と畳みかけて問う言葉ともみられるが、一本も出さずに握り拳で出すことを、零本^{れいぼん}というのは少し出来過ぎ^{できすぎ}ている。ところが遠く離れて滋賀県の犬上郡でも、同じ遊びは背の上から指を立てて、

レイボン、鹿の角何本、鹿の足何本

というのがあって、土地の人は零本と解しているようだが、是などは問いの始めだからここに妙に聞える。何か原因のまだ捉えられぬものが有るのではないか。小さなことのようにだが手掛り^{てがかり}はこんなところに潜^{ひそ}んでいると思う。

それからもう一つ、是は同じ滋賀県の大津などできく問答の言葉に、

鹿のつゝ何本あるや

三本あるわ

よう当てた

というのがある。「あるや」は児童の平語でないだけに、自然には生まれなかったもののように思われる。大津から京都へ越える山中の村でも、

鹿よ鹿よ角何本

九州方面でも朝倉郡に、

鹿々何本なりや

福岡市では、

鹿の角何本なるか

豊前の京都郡には、

鹿の角々何本なりや

三本なアリ

などという問答があるというが、是が飛び飛びに広い地域に及んでいる。少し煩わしいけれども列举してみると、たとえば香川県の三豊郡では、

鹿よ鹿よ立てたる角は何本か

同じく多度津^{たどつ}では、

鹿よ鹿よ汝^{なんじ}の角は何本あるか

東海道の方に来ても浜松市は、

鹿々何本の角ありや

相模^{さがみ}の海岸では、

鹿々汝の角は何本よ

と問い、甲州の北巨摩郡では、

鹿よ鹿よ鹿の角は幾本なりや

富山県の入^{にゅうぜん}善地方においても、

鹿よ鹿よ汝の角は何本なりや

と謂^いっている。こうした一致に至つては偶然ではありえない。或いは最初外国にあつたものを直^{ちよくやく}訳に移したかという想像も成り立つのである。

外部に独立した証拠のないかぎり、そう断定してしまうことはもちろんできない。我々の一つの仕事は明治以前の文献の中に、これを記したものが全く無いということを確かめることであるが、それは容易ではないだけでなく、記録に無いということは実はまだ当てにはならない。平凡なる日常の生活は、筆に表わされずに幾らでも伝わっているのです、他の多くの児童遊戯とても、必ずしも何かに出ていたとはきまらぬからである。しかしこの場合に考えて見るべきことは、我々の慣行には年に一度または人^{ひと}一代にただの一ぺんというような、くり返しの間遠^{まどお}なものが多いのに比べて、子どもの遊びは毎日の事件であり、これに参加する者は無数であるうえに、模倣^{もほう}と発明との境^{さかいめ}目も立たぬほど、印象に忠実な人たちであつた。機会さえあれば学び移し、遠くへ運んで行く足取り^{あしど}は速^{すみ}かだらう

と思う。ただこういう海川山坂をもって区画せられている国土において、いかにしてその機会が得られたろうかが、今はまだ具体的に答えられぬだけである。鹿々の遊戯などは、幸いにして互いによく似ていて、とうてい中心なしに別々に始まったものとは思えない。だから各地の実例を引合せて、やがてその運搬の路筋みちすじがわかってくるかも知れぬのである。

次にはこの遊びが古くからあったらしいということ、これも滋賀県と九州の一角とは、飛とび離はなれて二つだけあると思つていた間は、私などもそう推定せずにはおられなかったのだが、こうして中間の飛石がほぼ繋つながつている以上は、確かとは言えないまでもまた別な考えも成り立ちうるのである。同じ一つの土地からの報告を比べくらべてみても、四十歳の人は三十年ほど以前、三十歳の人は二十年ばかり前の、記憶に拠よつているのが多く、もうこの節はやつておらぬようだというのも事実である場合もあるが、一方には近頃まで、または小学生などが今でもしていると、知らせて来た者も有るのである。それと同様に古い時代からというのにも限度がある。二、三の老人の手紙によると、五十年前にもあつたということは事実らしい。越後えちごからは七十のお婆ばあさんが私の生まれる前からだと言つたという話も伝わっているが、それにしたところで、明治より古くはない。その以前は今はまだ明

らかになっておらぬのである。同じ越後からはまた次のような報告もあった。明治の初年、高田の女学校で教育を受けた老女が、この遊戯を知っている。この学校には米国の宣教師に特に子どもが好きで、本国の色々な遊戯を教えて遊ばせていた人がある。この人去つてのち一つずつ無くなつてしまつたというが、鹿々もその一つのように思うとのことである。ただし文句の翻訳ほんやくくちよう口調になつてゐるのは、越中えつちゅうの下新川しもにいかわのが最も近いだけで、越後では、

鹿々々の角何本だ

または、

しかしかこの角なんぼだ

佐渡の相川では、

しかしか指何本

というのが行なわれている。従つて直訳くさいから米国からの輸入だとも言えないとともに、高田がただ一つの出発点だとも無論認められない。ただ近世外国人から学び取ったということが、まるつきり有りうべからざる空想であるように私の考えていたのは行き過ぎだっただけである。

ただし女の子の学校において、米国宣教師が教えた遊びにしては、飛び乗りは少しばかり荒々しいように思われるが、是は唱え^{とな}ごとの文句も同様にだんだんと變つて来たものとも見られぬことはない。現在この遊戲の最も盛んな西南の二県などは、むしろ新しい流行地であるがために、今のようなちがつた形になっているのかも知れない。もっと他の地方の遊びかたを、詳しく尋ねてみなければならぬが、遠州浜松などでは家の中で、女の子も加わつてする遊びであつた。単にうつ伏^ぶしになっている背の上で指を立てて数を問うだけで、馬乗り・胴乗りというようなことまではしていなかった土地がまだ有るのかも知れない。前に言い落したが福岡県の田川郡でも、女の子は御手玉^{おてだま}を隠して数を当てさせるのに、やはり鹿々何本を唱えていた。またあいにくと地名を挙げてないが、是も北九州のいずれ

かの郡で、銀杏・榧の実などの数をあてる女の子の遊びにこの語を用い、なかには「中なかの中の小坊主」と同じく、手を繋いで輪になって中央に踞うずくまった児こに、鹿々何本と謂いつてその樹実きのみの数をあてさせたという例さえある。是を男の子の遊びの真似のように思っている婦人もあるらしいが、それにしても双方の動作があまりにちがいが過ぎる。察するにあの活かつぱつな飛乗りの運動に合がつた体たいしたのが後の進化であつて、最初はまず唱えごとの耳新しさが、小さな人たちの興味を誘うたので、それがまた奇抜きばつな文章言葉の、遠くまで伝わって行つた理由でもあろう。これを外国輸入の証拠と認めるのはまだ早いとしても、少なくともこの言葉のできた時代が、明治以後だということは疑われない。そうして子ども遊びの興味の中心が動きやすく、一旦その中心をはずれると存ぞんが外容易に、そこだけは改まって行くということと、女の子は比較的古い形を守るものだということが、是だけの材料からでも言えるかと思う。

青空文庫情報

底本：「いづも風土記・母の手毬歌」岩波文庫、岩波書店

1976（昭和51）年12月16日第1刷発行

2009（平成21）年7月9日第12刷発行

底本の親本：「定本柳田國男集 第二十一卷」筑摩書房

1962（昭和37）年12月25日刊

初出：「朝日新聞」

1941（昭和16）年4月1日～5月16日

鹿遊びの分布「民間伝承六卷九号」

1941（昭和16）年6月号

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2012年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

こども風土記

柳田国男

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>